

2019年度指定
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業
研究報告書・第1年次



令和2年3月
事業拠点校静岡県立三島北高等学校

2019年度指定
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業
研究報告書・第1年次

発行 令和2年3月
発行者 事業拠点校静岡県立三島北高等学校
校長 齊藤 浩幸
所在地 〒411-0033
静岡県三島市文教町1丁目3番18号
電話 055-986-0107
FAX 055-986-2480
Email mishimakita-h@edu.pref.shizuoka.jp

はじめに

静岡県教育委員会
高校教育課長 赤堀 健之

本年度、文部科学省指定事業でありますWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に採択されました。事業拠点校に県立三島北高等学校、県内事業連携校に県立沼津東高等学校、県立静岡高等学校、静岡市立高等学校、県外事業連携校に宮城県仙台二華中学校・高等学校、長崎県立長崎東高等学校をそれぞれ据えております。学校関係者の皆様をはじめ、県関係部局の運営組織委員の皆様、評価委員の皆様には、日頃より本事業に御尽力・御協力をいただき、心より感謝申し上げます。

本県のWWL事業構想名は、「ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアムの構築」としており、Society5.0の時代を担う本県の高校生に、より高度な学習の場を提供し、イノベーティブな人材育成に寄与していくことを目標としております。事業構想計画の柱としては、以下の3点があります。

第1に、ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システムの設計です。本県の高大連携事業の現状を分析した上で、高校生が大学の授業を受講し、単位を取得するための制度づくりを研究していきます。現在、県内の大学と検討を始めたところです。

第2に、ふじのくにグローバル・セミナーの実施です。主に事業拠点校で行っている課題研究のフィールドワーク研修を中心に進めていきますが、新たに、先進的なSTEM教育を実施している米国ミネソタ州立大学等への生徒の派遣を検討しています。事業拠点校だけではなく、事業連携校の生徒も一緒に研修に参加する予定です。

最後に、グローバルな社会課題研究の推進です。事業拠点校と事業連携校の生徒が切磋琢磨しながら、課題研究に取り組んでいける環境整備を目指します。初年度は、全国高校生フォーラムへの参加や静岡県グローバル課題研究ポスターセッション大会を実施しました。

新規の事業ということもあり、まだまだ手探りの状態で取り組んでいるのが現状です。本県のグローバル人材育成の一助となるよう、一丸となって取り組んでいきたいと考えておりますので、来年度以降も御支援・御協力のほどよろしくお願ひいたします。

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
事業拠点校としての取組み

WWLコンソーシアム構築支援事業拠点校
県立三島北高等学校 校長 齊藤 浩幸

平成26年度から5年間のSGH（スーパーグローバルハイスクール）研究指定が平成31年3月をもって終了しました。

事業を終了するにあたり、新学習指導要領の趣旨を踏まえつつ、5年間の成果を発展させるため、「総合的な学習の時間」を探究活動の時間にすること、テーマを「安全な水の確保」から「持続可能な開発目標（SDGs）」に変えて生徒の興味関心により幅広く課題設定ができるようにしたこと、1・2年次には英数国を中心に、地歴、理科、芸術など幅広く学び、3年次で進路実現に向け理科、地歴・公民に軸足を置いた文理選択を行う教育課程を職員会議で決定しました。議論の過程で、探究活動を進めるにあたり幅広い教養と教科を横断する思考力の重要性を全教員と共有でき、三島北高生に身に付けさせたい力を新学習指導要領に示す学力の3観点と関連付けて整理することもできました。

さらに、毎月1回程度、本校で開催されている静岡大学主催「静岡STEMアカデミー三島」では、理科教員がサポート役として関わってきたこと、アカデミーを通して出会ったミネソタ州立大学 Gillian Roehrig 教授、ミネソタ州オワトナパブリックスクール STEM コーディネーター Thomas Meagher 氏による、生徒の課題研究「Virtual Water の定量化アプリ」「Green Infrastructure」のプレゼンに対する助言でのSTEMとの関連性の示唆は、理科教員の興味関心を引き上げ、課題探究の新たな方向性を研究する契機となりました。

このような成果と背景のもと、Society 5.0に向けたリーディング・プロジェクト「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」に申請し、採択されました。

事業拠点校の校内の取組みとしては、3つあります。

1つは、課題探究活動に関するシラバスの再構築です。

全校生徒で取り組む課題探究活動を進めるチームは、将来的に異学年で構成されるチームに発展できるように、自らの興味・関心によるクラスを超えた編成としました。クラスを超えたチーム編成によってファシリテータ役の教員からの助言が浸透しにくいこと、テーマの多様化による専門家の確保等が課題として明確になってきました。

2つ目は、放課後や長期休業中の活動を中心とした学校設定科目「海外研修」と「STEM for SDGs」を教育課程上に位置付け、令和2年度入学生から開始することです。

「海外研修」はベトナム研修、「STEM for SDGs」はアメリカミネソタ州立大学研修、それに伴う事前・事後研修での意欲、成果を踏まえて単位認定できる仕組みにしています。

3つ目は、発表だけでなく、意見交換を通して課題探究活動や学びを深める場として「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」を開催します。新学習指導要領の実施に併せ、活発化していくであろう課題探究活動の目標となる大会になればと期待しています。

今後の御支援のほど、お願いいたします。

目 次

巻頭言「はじめに」

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業事業拠点校としての取組み

令和元年度事業完了報告書	1
--------------	---

第1章 管理機関の取組み

1 評価委員会等諸会議	19
2 海外研修	20

第2章 事業拠点校としての取組み

1 課題探究シラバスの開発	
(1) 概要	24
(2) 初期指導	27
(3) 外部人材の活用	28
(4) 紙芝居プレゼン	29
(5) 日本語ポスターセッション	29
(6) 生徒によるアンケート等の結果と分析	30
(7) 海外研修・修学旅行	33
(8) 留学生受入れ実績	37
(9) 次年度に向けて	38
2 英語コアスクール事業	
(1) 言語機能別スピーキング活動及びProficiency Testの実施	39
(2) 「TOEFL iBTスキルアップセミナー at 三島北高校」	40
(3) 「TOEIC対策講座」	40
(4) 三北杯高校生英語プレゼンテーション大会	40
(5) 平成30年度入学生の実績	41
3 新たな教育課程編成	
(1) 「総合的な学習の時間」を活用した課題探究活動とシラバスづくり	42
(2) 「教育活動支援業」モデル校事業による再任用教諭（短時間勤務）の配置	42
(3) 英語ネイティブ教員の配置	43
(4) 令和2・3年度入学生の教育課程編成	43
4 高校生国際会議進捗状況	
(1) 実施主体等	45
(2) 会議等の概要	45

第3章 事業拠点校・事業連携校との取組み

1 事業連携校への課題探究シラバスの提供	
(1) 事業拠点校におけるシラバス作成と実践	47
(2) 事業連携校等の教員を対象した授業公開	48
2 県外事業連携校とのビデオレター交流	48
3 県内拠点校・連携校間の「FALCon」プラットフォームの開発	
(1) S G Hの取組みから	49
(2) S G HからWWL コンソーシアムへ	50

4	ポスター発表等	
(1)	静岡県高校生グローバル課題研究ポスターセッション大会	5 1
(2)	事業拠点校・事業連携校 FALCon ディスカッションフォーラム (Make Friends セッション)	5 2
(3)	拠点校・県内連携校による全国高校生フォーラム視察	5 4
5	探究活動の発表実績等	5 5
6	事業連携校カリキュラム開発進捗状況	
(1)	静岡県立沼津東高等学校	5 8
(2)	静岡県立静岡高等学校	5 9
(3)	静岡市立高等学校	6 1
7	国の他事業との校内体制の整備	
(1)	S S Hとの関連や体制整備 (静岡市立高等学校)	6 3

第4章 事業拠点校・連携校の特徴的な取組み

1	静岡県立三島北高等学校	
(1)	海外研修・海外高校との交流	6 4
(2)	留学フェア@三島北高校	6 6
(3)	英語教員研修会	6 7
2	静岡県立沼津東高等学校	
(1)	総合的な探究の時間「揺籃」における取組	6 8
(2)	B B (Building Bridges) 事業	6 8
(3)	各種講演会	6 8
(4)	地域に学ぶ	6 8
3	静岡県立静岡高等学校	
(1)	2019年度全国高校生フォーラムへの参加	6 9
(2)	静岡県高校生グローバル課題研究ポスターセッション大会への参加	6 9
(3)	静岡市内合同エンパワーメントプログラムの実施	6 9
(4)	東海公立高等学校即興型英語ディベート交流大会への参加	7 0
4	静岡市立高等学校	
(1)	普通科1年「S S 探究Ⅰ」	7 0
(2)	普通科2年「S S 探究Ⅱ」	7 0
5	宮城県仙台二華中学校・高等学校	
(1)	仙台二華が目指す人物像	7 1
(2)	仙台二華のグローバルリーダー像	7 1
(3)	身に付けさせたい資質・能力	7 1
(4)	仙台二華の研究テーマ	7 1
(5)	水問題をテーマにした理由	7 1
(6)	3年間の学習の流れ	7 2
(7)	GS課題研究ⅡA・Ⅲのグループ構成	7 2
(8)	仙台二華 課題研究のづくり	7 3
(9)	特徴	7 3
(10)	カリキュラム上の工夫 (高大連携関係)	7 3
6	長崎県立長崎東高等学校	
(1)	ベトナムフィールドワーク	7 4
(2)	シンガポール国立大学 (NUS) における模擬国連	7 4

(別紙様式3)

令和2年3月 日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 静岡県静岡市葵区追手町9-6
管理機関名 静岡県教育委員会
代表者名 木苗 直秀 印

令和2年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
令和元年5月16日(契約締結日)～令和2年3月31日
- 2 事業拠点校名
学校名 静岡県立三島北高等学校
学校長名 齊藤 浩幸
- 3 構想名 ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアムの構築
- 4 構想の概要
Society5.0を担う静岡県の高校生が、個々の興味・関心・特性に応じて、より高度な学習プログラムに参加することにより、イノベティブなグローバル人材に必要な知識、能力及び心構えを身に付けることを目的として、関係教育機関と行政、企業及び関係団体が協力し、新たな学習プログラムの開発やそれを実施するための環境整備及びその普及改善に取り組むために、「ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアム(略称:FALCon)」を設置する。FALConは、上記の目的を達成するため、以下の事業を行う。
(1) 「ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム」の設計・構築及び運営
(2) 「ふじのくにグローバル・セミナー」の企画及び実施
(3) 課題研究を組み込んだ普通科高校の教育課程の開発及び課題研究シラバスの開発
(4) 教育機関等への事業成果発信及び周知・普及活動の実施

- 5 教育課程の特例の活用の有無
なし

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間(契約日～令和2年3月31日)										
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
FALCon 評価委員会									○		

運営組織委員会			○					○	○		
APS設計			←								→
グローバルセミナー				○ (視察)							
評価									○		

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 「ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアム」運営組織委員会・評価委員会
ア 運営組織委員会

	運営組織委員会委員	役職等
1	赤堀 健之	静岡県教育委員会 高校教育課長(委員長)
2	室伏 康男	静岡県総合教育局大学課長
3	影島 英一郎	静岡県地域外交局地域外交課長
4	齊藤 浩幸	静岡県立三島北高等学校長(事業拠点校)
5	神田 不二彦	静岡県立沼津東高等学校長(事業連携校)
6	志村 剛和	静岡県立静岡高等学校長(事業連携校)
7	杉山 禎	静岡市立高等学校長(事業連携校)

イ FALCon 評価委員会

	評価委員会委員	役職等
1	松本 茂	立教大学経営学部国際経営学科 教授 グローバル教育センター長
2	熊野 善介	静岡大学 創造科学技術大学院 大学院教育学研究科・教育学部教授
3	寺尾 康	静岡県立大学 国際関係学部 教授 学部長
4	中荃 憲一	静岡銀行 国際営業部 国際営業統括グループ グループ長
5	荻野 勉	東京学芸大学附属国際中等教育学校 校長
6	長井 利樹	静岡県立浜松北高等学校 校長

- b. 年度当初の5月に、事業拠点校、県内事業連携校及び県教育委員会事務局を交えて会議を開催し、事業概要について情報共有をするとともに、担当者の配置について確認を行った。

また、同時期に、県庁関係部局となる大学課と地域外交課の担当者に事業概要の詳細を説明し、各部局課長に運営組織委員として参画してもらうための素地を作った。

運営組織委員会は年度内に3回開催し、進捗状況、今後の計画について情報共有を行うことができた。

2月に開催した静岡県グローバルポスターセッション大会には、県外事業連携校の2校も参加した。大会開催前に、事業拠点校・県内外事業連携校及び県教育委員会事務局 合同会議を行い、意見交換を行った。

- c. 管理機関の高校教育課長は、主催する運営組織委員会の論点の整理を常に行い、進捗状況と課題が明確に判別できるように工夫した。関係部局及び事業拠点校・事業連携校との情報共有に目を配り、連携が円滑に実施されるように促した。

SGH 指定の実績を持つ拠点校の校長は、その知見を生かし、自校の持つ海外研修や課題研究の実施体制などについて、事業連携校への波及に努めた。事業連携校の校長は、全国高校生フォーラム等に積極的に参加し、自校での探究活動の開発等について調査を始めた。

- d. 令和2年1月28日(火)に第1回評価委員会(運営指導委員会)を開催した。第3回運営組織委員会との合同開催とし、県教育委員会事務局及び事業拠点校の担当者より、進捗状況並びに課題の説明を行った。事業拠点校におけるアンケート結果や英語力の変化についても報告をし、各評価委員が評価表(コメント表)に意見の記載を行った。

- e. SGHに引き続き、卒業時にメーリングリストを作成し、研究指定に関するアンケート等を実施する体制を構築する。大学における学びとWVLにおける取組の関連性、大学時における留学の希望有無等を調査するとともに、課題探究活動におけるファシリテーター役として定期的に事業拠点校において、高校生への指導・助言を行う。

研究期間終了時には、卒業生をパネラーとして招聘し、課題探究活動や大学の先取り履修の有意性について議論する場を設定するなど、現役高校生への推進を図る取組を行う。

- f. 留学生の受け入れにあたり、アレルギー等の確認はもちろん、制服、体操服、上履き、教科書等学校生活に必要な物品について、学校で貸与できるもの等を幹旋団体職員と打ち合わせを複数回行った。また、事業拠点校PTA役員がホストファミリーになったことにより、事業拠点校とホストファミリーが絶えず連絡が取りあえる状況を作った。ホストファミリー宅から学校まで自転車で15分程度の距離であるが、交通ルールに不慣れであることから、しばらくはホストシスターとバディを作り、同じ時間に登下校することとした。

アジア高校生架け橋プロジェクトとは別に受け入れているデンマークの女子留学生との時間割を調整し、受講できない科目の時間は、日本語能力検定試験の学習に取り組み、担当教諭に質問をしながら日本語運用能力を高めた。日本語運用能力の向上を実感できるプログラムとして、日本語プレゼンに挑戦し、発表した。

ゆっくりではあるが、丁寧に日本語を使い、説明する様子が印象的であった。

- g. 事業拠点校では、SGHの成果と課題、継続性を踏まえ、平成30年度末(SGH研究指定終了時)に「三島北高生に育成したい力」を策定した。令和元年度は、課題探究活動と「主体的・対話的で深い学び」を繋げる、知識・技能領域「協働性」を校内研修のテーマに据えた。

県総合教育センターが実施する授業改善推進サポート研修受講者の実践をもとに、各教科から選出された校内授業改善リーダーが授業改善に取り組んだ。

県総合教育センター指導主事が来校して行った「定期訪問」では、授業改善推進サポート研修受講者の授業を参観し、前年度受講者がファシリテーター役となり校内研修を行った。終了後のアンケートでは、「課題」と「問い」の違いやその重要性に触れた自由記述が多く見られた。

また、授業改善推進サポート研修受講者と同様に、各教科から選出された校内授業改善リーダーも県総合教育センターが推奨する「カリマネカード」を作成し、職員会議で提示した。

理科(化学)では、「卵殻膜だけの卵から水が飛び出たのはなぜか」の問いを通して、溶質と溶解、浸透現象を理解し、他の膜を通した浸透現象の法則性を見出すことができるようになる「カリマネカード」が提示された。

コミュニケーション英語Ⅱでは、「What forced the girl to give up her dream to be a doctor」の問いを通して、「日本の小中学校における生徒会長の男女比のグラフをもとに、男女差と社会的背景関係について分析した英文を書くことができるようになる「カリマネカード」が提示された。

令和2年度から開設する学校設定科目「STEM for SDGs」では、解決したい社会課題 (SDGs) と STEM とを関連付け、シラバスや課題設定に取り組んだ。

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、県総合教育センター研修、新たな科目を通して、授業改善の意識が高まっていると感じた。

h. タイ王国 女子高校生1名

【財政等支援】

- a. 事業拠点校を「英語教育コアスクール」に指定し、『英語でやりとりする力』を伸ばさせる指導法・評価法・体制づくりに向けて」をテーマに授業改善及び各種事業の実施に取り組んでいる。

授業改善については、(株)アルクと共同で開発した言語機能別発話訓練シートを用いて授業内帯活動を実施した。また、授業での発話活動の到達度を測る Proficiency Test の実施方法及び評価基準を検討し、英語で話す力の評価法の確立に取り組んだ。

また、「英語でやりとりする力」の育成が実感できる、TOEFL iBT 対策講座、TOEIC 対策講座、高校生英語プレゼンテーション大会等の事業も実施し、生徒の英語学習意欲の向上を図った。

ア 授業内での言語機能別スピーキング活動プログラムの開発

授業内での言語活動を通じて、生徒が発話量や文構造等を意識しつつ即興で発話する力をつけられるよう、「描写」「理由付け」「発問」等の言語機能別言語活動メニューを開発するとともに、評価基準の原案作成に取り組んだ。

イ 授業内でのスピーキング帯活動の実施

平成30年度2学期以降、1・2年生は英語の授業内で、言語機能別ワークシートを活用した帯活動に取り組んでいる。授業内で5分間の Speaking 活動を毎回実施し、英語による質問・応答及び簡単な自己評価をその場で行っている。令和元年度は、1年生が「叙述」「描写」「理由付け」「質問」の4つの言語機能に関する活動に取り組み、2年生は「賛否」「意見を述べる」「説明する」「提案」「是非を論じる」の5つの言語機能に取り組んだ。

ウ Proficiency Test の実施

授業内で取り組んだ言語機能の定着度を測るため、1・2年生は全クラスで各学期末に Proficiency Test を実施した。パソコン室でヘッドセットを使用し、解答音声ファイルを保存し、後日、音声ファイル全員分を採点し、成績に組み入れている。

なお、採点に当たり採点者間のブレがないよう、部分的にアルクの研究員にも採点を依頼し、オンライン会議で事業拠点校教員と採点結果のブレに関して、擦り合わせを行った。

エ 「英語でやりとりする力」の育成が実感できる事業

- (7) 「TOEFL iBT スキルアップセミナー at 三島北高校」

海外大学への進学、国内大学から協定先海外大学への留学、日本の大学入学者選

拔等に活用される TOEFL iBT の対策講座を行った。また、教員も講座を受講し、自らの英語力向上、指導力向上を目指した。

【実施日】令和元年8月13日

【講師】TOEFL テスト公認トレーナー 鬼頭和也 氏（城西大学 助教）

【参加者】生徒22名（1年生：8名、2年生：14名）、教員3名

※生徒は、英検準2級以上取得者を対象に募集

(イ) 「TOEIC 対策講座」

大学生の就職活動、海外大学への進学、国内大学から協定先の海外大学への留学、日本の大学入学者選抜等に活用される TOEIC の対策講座を行い、生徒が将来の受験・留学・就職等に対応する英語力を身に付ける一助とした。

【実施日】令和元年12月26日（木）・27日

【講師】英語インストラクター 清水 昌代 氏

【参加者】生徒18名（1年生：15名、2年生：2名、3年生：1名）

b. 「教育活動支援事業」モデル校事業による再任用教諭（短時間勤務）の配置

ア 趣旨

このモデル事業は、学校が抱える課題に対応し、業務改善の取組を進めることを目的として、実施する事業である。

イ 配置と実践

『総合的な学習の時間』を活用した課題探究活動とシラバスづくり」というテーマで申請した事業拠点校に対し、短時間の再任用教諭の英語教員を配置した。

事業拠点校では、「WWL 推進室」を校務分掌上に位置付け、WWL 推進室の英語教員の授業時間数を軽減し、『総合的な学習の時間』を活用した課題探究活動とシラバスづくり」に取り組んでいる。

短時間再任用教諭の担当する授業時間数を12時間とし、WWL 推進室所属の英語科教員2名の担当授業時間数を約6時間ずつ軽減した時間割を編成した。

ウ 授業軽減による担当教諭の業務

課題探究活動のシラバスの作成はもちろん、授業前日までに本時のゴールが示された指導案を作成し、朝の打ち合わせを活用し、周知・徹底を図っている。生徒に対しては、Classi を活用し、本時の目標やゴールを提示している。

また、課題探究活動の深化に重要な役割を果たす、各分野の専門家への連絡について、本時の狙いや目標を提示しながら、より大きな効果が得られるよう連絡・調整を行い、派遣文書の作成も担当した。

c. 英語ネイティブ教員の配置

英語科・国際科等を設置する県立高等学校において、高い英語運用能力を有し幅広く国際社会で活躍できる人材を育成することを目的としてネイティブ英語教員の採用選考試験を実施した。その結果、2名を合格とし、平成31年度人事異動により、うち1名を事業拠点校に配置した。

職務内容は、高等学校教員として、授業に加え、部活動顧問や分掌業務、学級担任など、教員としての業務全般を担当することとした。

事業拠点校では、学年は1年部、分掌は WWL 推進室、部活動は国際交流部に配属した。授業では、「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」を主に担当し、静岡県教育委員会研究指定「英語コアスクール」事業における、テーマ「英語でやりとりする力」の育成に向け、生徒への指導だけでなく、教員に対しても評価基準を提案するなど事業拠点校の英

語教育を牽引した。

また、「総合的な学習の時間」を活用した課題探究活動では、特に英語によるポスターやプレゼンテーション資料作成時の指導に関わり、日本人英語教員の負担感を軽減した。

WWL 推進室の業務については、STEM 推進コース視察における現地との交渉、プレゼン資料の作成を行い、高校生国際会議のテーマの修正案の提案、分科会の構想立案など重要な役割を担った。

【AL ネットワークの形成】

- a. 「ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアム」運営組織委員会・評価委員会
ア 第1回運営組織委員会

日 時 令和元年7月16日 午前10時から正午

会 場 静岡県庁 西館 教育委員会議室

議 事 文部科学省指定事業概要

- ・Society 5.0に向けた高等学校改革パッケージ(WWL、地域協働)
- ・2019年度SGH・WWL・地域協働事業(グローバル型)合同連絡協議会報告
- ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアム事業
- 今年度の事業計画
- ・事業拠点校(三島北)の取組
- ・事業連携校(沼津東、静岡、静岡市立)の取組
- ・高大連携の現状(大学における学修の現状)

- イ 第2回運営組織委員会

日 時 令和元年12月10日 午後1時30分から3時30分

会 場 静岡県庁 西館 教育委員会議室

議 事 ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システムの構築

ふじのくにグローバル・セミナー

グローバルな社会課題研究

高校生国際会議(2021年度実施予定)

- ウ 第3回運営指導委員会・第1回評価委員会

日 時 令和2年1月28日 午前10時から正午

会 場 静岡県庁 西館 教育委員会議室

議 事 事業概要説明

各事業の進捗状況

- ・ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システムの構築
 - ・ふじのくにグローバル・セミナー
 - ・グローバルな社会課題研究
- 質疑・意見交換・評価

- b. ふじのくに地域・大学コンソーシアムを構成する静岡県立大学、静岡大学と「ふじのくにアドバンスト・プレイスメントシステム構築」について、WWL 管理グループ、事業拠点校校長と意見交換を行った。

静岡大学との意見交換では、オンラインやe-ラーニング等を活用し、高校生に対し、大学の講義等を提供するシステム、大学の単位認定の仕組みについて検討していく方向性が示された。

また、この方向性については第2・3回運営組織委員会に議題として提出し、運営組織委員会委員で共有を図った。

- c. AL ネットワークにおける国内外の大学等の連携については、令和3年3月に事業拠点校、県内事業連携校の生徒を派遣するため、令和元年8月に、事業拠点校校長及び英語ネイティブ教員、事業連携校の教諭2名がミネソタ州立大学等を訪問し、アメリカにおけるSTEM教育の現状について視察した。
- d. 管理機関である静岡県教育委員会高校教育課指導第1班を1名増員し、WWL 管理グループを設置し、事業拠点校・事業連携校との連携、各校におけるカリキュラム開発を支援した。
また、事業拠点校では、本事業推進のため、海外交流アドバイザーとして静岡県立大学客員研究員を雇用し課題探究活動支援を、臨時事務職員を雇用し WWL 予算執行補助を担当した。
事業拠点校の組織として、校務分掌上「WWL 推進室」を設置し、推進室長を学校運営委員会のメンバーとし、事業拠点校が取り組む事業の企画・運営、連絡・調整を通して、事業拠点校が学校全体で取り組むことができる体制とした。
「教育活動支援業」モデル校事業による再任用教諭（短時間勤務）の配置や英語ネイティブ教員の配置については、【財政等支援】bに記載した。
- e. 主催を管理機関である静岡県教育委員会とし、開催市等を含めた「2021 ふじのくに高校生国際会議実行委員会」と下部組織（運営主体）として「運営委員会」「生徒実行委員会」を組織し、運営委員会を事業拠点校に置くこととした。
ア 期 間 令和3年8月3日～8月6日
イ 会 場 三島市民文化会館 ゆうゆうホール 県立三島北高等学校
ウ テーマ Multi-Dimensional Approach to SDGs related to Crisis (仮)
Crisis に負けない持続可能な社会づくりを目指して
～SDGs の視点からの多面的なアプローチ～
エ 参 加 参加高校生約50名
国 内 事業拠点校 三島北高
事業連携校 沼津東高 静岡高 静岡市立高 長崎東高 仙台二華中高
海 外 アメリカミネソタ州 (Owatonna St. Paul) シンガポール (Jurong West)
ベトナム (Vinschool) 台湾 (馬公高級中学) オーストラリア (調整中)
企画・運営として生徒実行委員約50名が参加する。一般参加は検討中である。
- f. 課題研究に取り組んでいる県内の高校生が一堂に会し、それぞれの課題研究をポスターセッション形式で発表することにより、グローバル人材として必要な発信力と課題解決力の伸長を図るため、令和2年2月8日に「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」を開催した。
WWL 事業拠点校・事業連携校、文部科学省の研究指定を受けた県立榛原高校、県立熱海高校、県立天竜高校も含めた参加校17校40チームが参加した。
- g. 秋田県立能代高等学校との共通プラットフォーム上での課題研究発表・意見交換の成果を踏まえ、事業拠点校・事業連携校間の共通プラットフォーム「静岡 WWL 高校『FALCon』」を開設した。
「FALCon ディスカッションフォーラム」を試行の場とし、参加する生徒がログインし、自己紹介、課題研究の内容等を共有できるものとした。併せて、引率教員、管理職にも ID を付与し、生徒間のやりとりを共有できるものとした。

- h. 静岡大学における高校生の単位認定システムについて、令和3年度からの実施に向けて検討中である。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（契約日 ～ 令和2年3月31日）										
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
カリキュラム開発	←										→
グローバルセミナー				○ (視察)							
普及活動	○ (公開)					○ (公開)				○ (公開)	→
学校自己評価	○								○		

(2) 実績の説明

【研究開発・実践】

- a. SGHの研究指定期間中は教育課程の特例を活用し、教科「情報」を学校設定科目「GWI(Global Water Issues)」に置き換え、課題探究活動に取り組んできた。SGH終了にあたり、「総合的な学習の時間」を課題探究の時間とし、新学習指導要領での「総合的な探究の時間」に移行できるようにした。さらに、2点変更を加えた。
- 1点目は、これまでクラス単位で行っていた課題探究活動を、全学年同一時間帯で行わなければならないことから、課題探究チームの編成をクラスを超えて、生徒自らの興味関心によりチーム編成をすることとした。
- 2点目は、「安全な水の確保」から「持続可能な開発目標(SDGs)」に変え、17個のゴールのうち、1番「貧困をなくそう」から6番「安全な水とトイレを世界に」までをターゲットとした。
- この変更により、シラバスの見直し、外部人材の新たな発掘は予想できた課題であった。なかでも最大の課題は、SGHでは探究活動チームはクラスの生徒で編成されており、担任や副担任が絶えず進捗状況を確認できた一方で、変更後はクラスを超えた編成となっているため、進捗状況の確認に難しさが露呈した。言い方を変えれば、生徒の主体性を如何に伸ばすかという点が課題として浮彫になったと言える。
- b. 事業拠点校では、SGH研究指定期間から実施してきたベトナム研修について、WWL研究指定期間においても実施していく。
- 地歴科教員や県内ベトナム人留学生による講義を通して、ベトナムの歴史・文化やSDGsに関わる課題について理解を深めるとともに、課題を設定し、課題に対する解決方法を事前研修でまとめ、8月下旬に行われるベトナム研修に参加した。
- 現地では、JICAハノイ事務所の協力によるボランティア活動現場の視察、水資源機構のグエン・カオ・ドン教授の英語による講義を通して、ハノイおよびベトナムの治水の歴史、水源を他国に持つ大河の治水問題、洪水の予報システムの開発に関わる最先端事業について学んだ。
- また、事後研修では、現地研修を通して学んだことを活かし、研究の修正・再調査を行った。
- c. 学校設定教科「WWL」と学校設定科目の開設
- 学習指導要領に示される教科・科目以外に、SGHの成果と課題等を踏まえ学校設定科目を開設することとした。

以下のア、イの学校設定科目は放課後、週休日、長期休暇等を活用した活動を評価し、単位認定していく。また、上級生が下級生を指導したり、下級生の意見を研究に反映させ、複数年にわたり課題解決に取り組むことができるよう、課題探究チームが異学年で編成できるようにした。

ア 海外研修

上記bで示したように、事前研修、ベトナム現地研修、事後研修に対する意欲と成果、プレゼンテーションやポスターセッションにおける表現力等を評価し、単位認定していく。

イ STEM for SDGs

新たな教科・科目の設定において、構想計画書では「Environmental Science」において、「地球環境と資源」「土壌と水」「エネルギー資源と消費」「環境汚染」について学ぶと示した。

しかし、WWL 推進室職員や理科教員との議論により、静岡大学熊野善介教授の主催する「静岡 STEM アカデミー三島」に助言者として築いてきた関わりを活かし、課題探究活動のテーマである SDGs との関連性を高めた「STEM for SDGs」とし、職員会議に提案した。

この科目は、高校生国際会議テーマ「Multi- Dimensional Approach to SDGs」について、STEM の切り口から SDGs を捉え、解決策を提案し、実証していく教科横断型科目とする。この成果を持ってアメリカミネソタ州立大学を訪問し、Gillian 教授や大学生からの助言を通して、課題研究の修正・深化を図り、現地高校生と課題研究に関するプレゼンテーションを行い、共有する。

事前研修、現地研修に対する意欲と成果、プレゼンテーションやポスターセッションにおける表現力等を評価し、単位認定していく。

令和2年度入学生から開設される科目であるが、平成31年(令和元年)度入学生から希望者を募り、構想づくりを開始した。

- d. 「STEM for SDGs」はSTEMの切り口からSDGsを捉え、解決策を見出す科目としていることから、同一の生徒が履修・修得できるよう、1年生を対象に「海外研修」におけるベトナム研修を、2年生を対象に「STEM for SDGs」におけるアメリカミネソタ州立大学訪問を実施する。従って、「海外研修」は1年次で、「STEM for SDGs」は2年次での履修を推奨する。
- e. 新学習指導要領に基づく教育課程編成への円滑な移行を踏まえ、令和2年度入学生から新教育課程を編成した。
これまで本校では、文系・理系の選択を2年次で行ってきた。1年次では入学間もない6月に次年度の教育課程説明会を行い、夏休みに考え、10月予備登録、11月本登録のスケジュールで指導してきた。そのため、自らの適性をじっくり見極めることなく文理選択を行い、結果としてミスマッチを起こす生徒が一定数いる状況であった。
上記aで示したように「総合的な学習の時間」を探究活動の時間とすること、1・2年次では国語、数学、英語に軸足を置きつつ、探究活動を深める理科、地歴・公民、家庭、保健体育をバランス良く学ぶことができること、3年次では生徒個々の進路実現も踏まえ、文理選択を行い、理科・地歴を多く学ぶ教育課程を編成した。
1・2年次では極力科目選択を減らし、学年全員で学ぶことができることを考慮した。
- f. 課題探究活動のテーマ「安全な水の確保」から「持続可能な開発目標 (SDGs)」に変更したことを踏まえ、SGHの成果を活かし1年間で4期に分けたシラバスを作成し、本時の活動が年間のどの位置づけにあるかを明確に示した。

ア 課題発見の準備とチームビルディング

WWL 推進室による1年部正副担任を対象としたSDGs研修会を実施した。また、初期指導では、SDGsについて国連広報センターの動画を視聴し、これから取り組むべき課題のイメージを共有した。

グループワークでは、SGHの学校設定科目でも活用してきた「プロジェクトWet」のアクティビティー『重大な過ち』を体験し、課題解決の流れに則った研究をするために必要なスキルについて話し合った。

イ 課題設定とフィールドワーク

関心のあるSDGsをテーマとし、クラス横断型のゼミ形式で課題探究を進めている。共通のSDGsテーマで集まった他のクラスの仲間とともにチームビルディングを行い、課題を掘り下げていった。

夏休みにフィールドワークを計画するため、調査で得られた情報の整理方法も重要になることから、静岡県経営管理部ICT推進局統計利用課の天野佑紀氏による「統計出前講座」を実施した。

ウ グループ発表

中間ゴールとしての「紙芝居プレゼン」を含め2回の専門家からの助言をもとに研究を深化させ、2月8日に開催される「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」への出場権を賭けた、2月3日「日本語ポスターセッションSDGsゴール別予選会」を設定した。

エ 個人レポート

「日本語ポスターセッションSDGsゴール別予選会」後、副担任が小論文・レポートの書き方を指導し、下書きデザインを作成する。この下書きデザインに基づき、各自個人レポートを作成していく。作成後、チームで内容をすり合わせ、確認後提出する。

個人レポート作成を通して、新たな課題や手法を発見し、2年次の課題探究活動に繋げていく。

- g. 12月4日、1月8日に静岡大学全学入試センター 雨森 聡准教授、学術院融合・グローバル領域大学教育副センター長 須藤 智准教授とWWL管理グループ、拠点校校長と意見交換を行った。

構想計画書に示す「大学教育の先取り履修の実施に向けた計画」では「課題型」「集中講義型」「課題研究型」の3タイプを示した。

この3タイプに対し、両准教授から以下の意見と方向性が示された。

「課題型」については、「未来の科学者養成スクール」が候補になる。この事業は科学者やエンジニアとして将来活躍し、様々な課題解決に貢献したいと考える高校生のためにプログラムであり、すでに静岡大学が実施している事業である。

「集中講義型」では、大学入学時に全学生に学ばせたい科目として現在開発している「数理データサイエンス」、開発予定である「アカデミックスキルズ」が候補となるであろう。大学で学ぶにあたり必要となるスキルであり、WWLの高校生が対象であれば、大学での集中講義に加え、eラーニング等で学びたいときに学べる環境を整えることも可能である。

「課題研究型」では、欧米の大学生が夏季休暇を利用し日本の大学に短期留学する傾向があり、静岡大学でも受け入れについて検討している。留学生と高校生とが協働により地域の課題を解決するPBL型も可能性がある。ただし英語力と地域に関する知識量が必要であり、希望する高校生全てが受講可能とは考えにくい。

今後、提供する科目や高校及び大学の単位として認定できる仕組みについて静岡大学、管理機関とで協議を重ねていくこと、2月の静岡大学理事会等へ諮っていく方向性が示された。

- h. ミネソタ州立大学 Gillian 教授に加え、サイエンスコーディネーター Marty Davis 氏、STEM コーディネーター Thamas Meagher 氏の協力のもと、WWL 拠点校、事業連携校の高校生 10 名程度を選抜し、2021 年 3 月にアメリカミネソタ州立大学での STEM 研修、セントポール、オフトナの現地高校生との課題研究プレゼンや交流を中心とした訪問を企画している。

募集要項等は管理機関で作成しているが、事業拠点校では、上記 c イに示す学校設定科目「STEM for SDGs」履修者から意欲・成果をもとに推薦したいと考えている。

- i. アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生の受け入れについては、タイからの留学生 1 名を受け入れている。

2 年 4 組に在籍し、現代文、コミュニケーション英語等の授業に参加している。また、課題探究活動では「日本の英語教育」チームに属し、外国人から見た日本における英語教育について意見交換をしている。

受講できない科目の時間は、日本語能力検定試験の学習に取り組み、質問をしながら日本語運用能力を高めている。日本語運用能力の向上を実感できるプログラムとして、「タイのクリスマス、お正月」のプレゼンに積極的に取り組み、発表した。

部活動では、国際交流部に参加し、英語ディベートの練習会にも参加している。

積極的に学び、吸収しようとする姿勢は本校の生徒に良い影響を及ぼしている。

- j. 「静岡 WWL 高校『FALCon』」の開発 ～学校を超えた課題探究プラットフォームづくり～
ア SGH の取り組みから

事業拠点校では、SGH における課題探究活動を円滑に行っていくことを目的として、平成 27 年度から Classi を導入した。

「校内グループ」は、全校生徒、学年、ホームルーム、部活動などのグループに加え、課題研究ごとのグループも作成することができる。また、単なる一方通行の情報伝達だけでなく、グループ構成員からの考えの投稿、資料提供もできる機能を有している。

そこで、「校内グループ」を活用し、課題探究に関する専門家や教員からの助言や生徒間の意見交換、ポスター原稿の提出等を行い、コミュニケーションツールとして活用してきた。

- イ 学校を超えた課題探究活動 ～秋田県立能代高等学校との取組～

課題探究活動に取り組んでいる秋田県立能代高等学校と合同発表会を行った。平成 31 年 3 月 15 日午後 1 時 30 分を会議実施日時と決め、2 月 27 日に遠隔会議システムを用いて教員間の会議を行った。

また、生徒たちは、チーム紹介動画と発表資料を Classi 上にアップし、お互いの資料を読み込んで、事前学習を行った。

合同会議時には、能代高校 2 チームが、発表 10 分、質疑応答 3 分をそれぞれ行い、三島北高校 4 チームがそれぞれ発表 5 分、質疑応答 3 分を行った。発表・質疑応答後、情報交換会の準備としてワークシートを用いて、「発表の振り返り」「探究学習で学んだこと」「相手高校に聞いてみたいこと」などをまとめた。

- ウ SGH から WWL コンソーシアムへ

秋田県立能代高等学校との Classi を用いた共通プラットフォーム上での課題研究発表・意見交換の成果を踏まえ、WWL コンソーシアム構築支援事業における事業拠点校・

事業連携校間で行う準備に取り組んだ。

取組として、2月8日「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」終了後に事業拠点校（三島北高）、事業連携校（沼津東高、静岡高、静岡市立高、長崎東高、仙台二華中高）で行う「FALCon ディスカッションフォーラム」に参加する生徒がログインできる課題探究プラットフォームを構築した。

併せて、引率教員、管理職間で共有できるプラットフォームも構築した。

具体的には

- (ア) Classi 上プラットフォームに「静岡 WWL 高校『FALCon』」という仮想高校を開設する。
- (イ) 参加する生徒、引率教員、管理職にログイン用のIDを配布し、1月17日までに各自ログインする。
- (ウ) 「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」までに参加する生徒は自己紹介動画等を「静岡 WWL 高校『FALCon』」にアップし、共有する。
- (エ) ポスターセッション大会終了後に行う「FALCon ディスカッションフォーラム」の「Make Friends セッション」で活用する。
- (オ) SDGs のテーマごと割り振られたメンバーで、「アクション宣言ムービー」を作成し、発表する。

エ 今後の活用

「静岡 WWL 高校『FALCon』」の成果と課題を踏まえ、来年度実施予定の「高校生国際会議プレ大会」の WWL 拠点校・連携校参加者間の情報共有や事前研修に活用していく。

また、令和3年度の開催予定である「高校生国際会議」における生徒実行委員会での情報共有や進捗状況の確認等へ応用していく予定である。

j. 課題探究活動の普及

ア 「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」の開催

(ア) 目的

課題研究に取り組んでいる県内の高校生が一堂に会し、それぞれの課題研究をポスターセッション形式で発表することにより、グローバル人材として必要な発信力と課題解決力の伸長を図る。

(イ) 日時

令和2年2月8日 午後1時から4時

(ウ) 参加校 17校 40チーム

【文部科学省研究指定】

- WWL 三島北高
沼津東高 静岡高 静岡市立高 長崎東高 仙台二華高
- グローバル型 榛原高
- 地域魅力型 熱海高
- プロフェッショナル型 天竜高（アソシエイト）

【東 部】伊東商業高 沼津工業高 富士市立高

【中 部】静岡東高 静岡城北高 駿河総合高 焼津水産高 藤枝北高

イ 事業拠点校・連携校による FALCon ディスカッションフォーラム

(ア) 目的

WWL 事業拠点校及び事業連携校の高校生が一堂に会し、それぞれの課題研究について、議論を通し課題研究をさらに深化させ、イノベーティブなグローバル人材として課題発見力、解決力の伸長を図る。

(イ) 内 容

① Make Friends セッション

令和2年2月8日 午後4時30分から5時30分

② ディスカッションフォーラム

令和2年2月9日 午前9時から午後0時30分

各グループごと「アクション宣言ムービー」製作・発表、視聴

(ウ) 場 所

県立三島北高等学校 地学教室

(エ) 参加者

三島北高8名 沼津東高6名 静岡高4名 静岡市立高3名 長崎東高4名
運営補助 三島北高5名 (ベトナム研修参加者)

ウ 事業連携校等への普及

(ア) 事業連携校を対象とした授業公開

5月15日 WWL 推進室による「問題解決の流れ」

10月23日 「紙芝居プレゼン」及び専門家による指導・助言

静岡県高等学校長協会 教育課程専門委員会も参観

(イ) 県内公立高校を対象とした授業公開

2月5日 SDGs テーマ別「日本語ポスターセッション大会」

8 目標の進捗状況、成果、評価

- a. SGH 研究指定時に作成したアンケートを1月に実施し、平成31年4月入学生（WWL 1期生）と平成29年4月入学生（SGH 4期生）、平成30年4月入学生（SGH 5期生）の1年次の結果と比較した。

ただし、結果の表記は、文部科学省の示すスーパーグローバルハイスクール事業検証に係る指標と類似性があるアンケートの結果と「非常にそう思う」と回答した割合(%)である。

【資質・能力（グローバルコンピテンシー）】

「d. 複数の視点から問題の原因を考える」

「物事を多面的に見る姿勢が身についている」(H29 22.2 H30 27.1 H31 11.5)

【グローバルマインドセット】

「a. 様々な外国に行ってみたい」

「高校在学中に、留学や海外への研修に行きたい」(H29 14.3 H30 13.7 H31 13.2)

「i. 将来は、外国の大学や大学院への留学（6か月以上）も視野に入れて勉強したい」

「高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい」(H29 8.3 H30 13.7 H31 17.8)

「k. 将来、外国で働くことも視野に入れて、職業選択したい」

「将来、国際関係や英語を使う職業に就きたい」(H29 11.1 H30 12.0 H31 11.1)

【PPDAC（探究型行動）】

「1. 提案を適切にプレゼンテーションできる」

「日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身についた」

(H29 21.9 H30 30.8 H31 9.7)

平成 31 年 4 月入学生のそれぞれのアンケートに対する「非常にそう思う」の割合が低い要因として次のようなことが考えられる。

平成 30 年度までは、クラスごと決まった時間割で探究活動が行われていたため、

- ① 課題研究チームのメンバーがクラスの生徒で構成されていた。
- ② 正担任・副担任が指導・助言を行っており、授業以外の場面でも助言できる環境ができていた。

今年度からは、

- ① 興味・関心に基づくチーム編成で、クラスを超えたメンバーで構成されており、学年を構成する教員がファシリテート役を行った。
- ② チームメンバーが一堂に会すのは、探究活動の時間（毎週 1 回）しかなかった。

「非常にそう思う」の割合を占める割合に「そう思う」を加えた、良好な回答の割合に大きな差は見られないことから、より興味・関心を深め、主体的に学ぶ環境について、校内で検討している。

また、SGH では 1 年次では「LWI(Local Water Issues)」2 年次では「GWI(Global Water Issues)」と地域から世界へと段階的に学習したが、今年度から SDGs について 1 年次から学び、世界を直視するため、戸惑いがある生徒も見られた。専門家による指導・助言の回数を増やすなどの対応も検討したい。

令和 2 年 1 月 28 日に開催された第 1 回評価委員会では、委員よりアンケート結果の値が低下した理由について聴取すべきとの意見が出され、年度末までに聞き取り調査を行う。

「高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい」(H29 8.3 H30 13.7 H31 17.8)の問いに対し、「非常にそう思う」割合が高いことはこれまでにない傾向であるが、昨年 9 月から研究指定を受け取り組んでいる英語コアスクール事業のテーマである「英語でやりとりする力の育成」でスピーキング力が向上していることも関係していると考えられる。

- b. ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアムは 4 つの AL ネットワークの役割を持っている。

ア 「ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム」の設計・構築及び運営

静岡県大学課長も委員となる WWL 運営組織委員会を 3 回開催し、システム構築のための課題等について意見交換を行った。その現状を理解し、静岡県大学課と「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」が連携している利点を活用し、高校生の先取り履修等の可能性について、静岡県立大学、静岡大学と意見交換を行ってきた。

7 (2)g で示した通り、静岡大学では構想書に示した 3 タイプについて、すでに実施している事業や今後開発予定の科目等の提示により、その実現性について提示を受け、大きく前進した。今後、事業の目的を明確にしつつ、静岡大学から提供される講義やコンテンツの内容等について議論を重ね、実現に向けた課題を整理していく。

また、事業拠点校・連携校間の連携については、県内連携校校長は運営指導委員会委員であり、情報の共有を行ってきたが、2 月 8 日には県外連携校（長崎東高、仙台二華中高）を含めた管理機関、事業拠点校・連携校合同会議を実施し、進捗状況、次年度の計画等について共有した。

イ 「ふじのくにグローバルセミナー」の企画及び実施

事業拠点校・県内連携校の教員 4 名で、アメリカミネソタ州立大学及び近隣のパブリックスクールを訪問し、STEM 教育の現状について学ぶことができたことは大きな成果であった。

事業拠点校では、「STEM for SDGs」を令和 2 年度入学生の教育課程に位置付けること

ができ、現1年生で興味・関心のある生徒がこの科目の事前準備に取り組み始めた。

また、連携校では参加した教員が現状の授業の中で、どのようにSTEM的思考を取り入れることができるか研究している。8月に静岡県総合教育センターで実施された「STEM研修」には事業拠点校の理科教員が参加し、「STEM for SDGs」に活用できる教材開発に取り組んでいる。

この研修会参加者には理科教員だけでなく、工業高校の教員も参加しており、県立高校への広がりも期待できる。

ウ 課題研究を組み込んだ普通科高校の教育課程の開発及び課題研究シラバスの開発
新学習指導要領に示される「総合的な探究の時間」「理数探究」の導入という背景もあるが、SGHから引き続くWWL事業拠点校の採択には関心が高い。

(7) 事業拠点校・連携校

5月15日の授業公開では連携校から4名の教員(校長含む)が、10月23日の授業公開では5名の教員が参加し、授業公開終了後、シラバスや課題探究活動に関する質疑応答を行った。

(イ) 県内公立高校

2月5日の授業公開は、県内公立高校を対象に行い、25名(校長含む)が参加した。また、10月23日の授業公開では、静岡県高等学校長協会 教育課程専門委員会10名も参観した。

(ウ) 全国フォーラム等への参加

全国高校生フォーラムポスターセッション大会

令和元年12月22日 東京国際フォーラム

事業拠点校・連携校 3校出場

一般見学 39名

エ 教育機関等への事業成果発信及び周知・普及活動

事業拠点校ホームページに日本語・英語版WWLコーナーを開設するとともに、静岡県教育委員会Facebook等にイベント告知を行った。

(7) 「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」の開催

日時 令和2年2月8日 午後1時から

会場 県立三島北高等学校 旧体育館

参加校

【文部科学省研究指定】

○WWL 三島北高
沼津東高 静岡高 静岡市立高 長崎東高 仙台二華高

○グローバル型 榛原高

○地域魅力型 熱海高

○プロフェッショナル型 天竜高

【東 部】伊東商業高 沼津工業高 富士市立高

【中 部】静岡東高 静岡城北高 駿河総合高 焼津水産高 藤枝北高

(イ) 静岡県外の教育機関による訪問

長野県立上田染谷丘高校 東京都立豊島高校 長崎県立長崎東高校

長野県立上田高校 岩手県立盛岡一高校 岐阜県立岐阜北高校

岡山県立城東高校 福井県立三国高校 新潟県立新潟高校

広島県立呉三津田高校 埼玉県教育委員会

(ウ) 中学校主催学校説明会・訪問依頼

【沼津市】今沢中学校 第四中学校 第五中学校 浮島中学校

【三島市】北中学校 北上中学校 南中学校 錦田中学校 山田中学校

- 【清水町】清水中学校 南中学校
- 【長泉町】長泉中学校 北中学校
- 【函南町】函南中学校 東中学校
- 【熱海市】熱海中学校 多賀中学校
- 【伊東市】宇佐美中学校 南中学校 門野中学校 対島中学校
- 【伊豆の国市】長岡中学校 韮山中学校 大仁中学校
- 【伊豆市】修善寺中学校 中伊豆中学校
- 【裾野市】深良中学校 東中学校 富岡中学校 西中学校
- 【御殿場市】富士岡中学校 南中学校、御殿場中学校、原里中学校
- 【東伊豆町】熱川中学校

(エ) 活動実践発表・パネラー依頼

岐阜県教育委員会 関西学院高等部

- c. 「ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム」参加者数に関する「短期的目標（～2020年）」「中期的目標（～2023年）」への達成度については、管理機関と静岡大学との協議を通して、大学の求める資質と高校生のニーズ等のバランスを図ることにより、増加が期待できる。

また、大学等の科目を先取り履修し単位認定できる仕組みについても静岡大学が研究を進めることから、「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」を構成する大学への波及も期待できる。令和2年度前期に予定している試験配信（e-ラーニング）されるコンテンツの質・量だけでなく、管理機関が進めるICT等の環境整備の進捗状況も重要となる。

県内連携校を構成する静岡市立高校においては科学探究科（SSH指定）、沼津東高校においては理数科で行ってきた課題探究活動を普通科へ広げること、静岡高校においては全校生徒へ広げること検討をしている。学校の実情に応じて進捗状況に違いはあるが、新学習指導要領に基づく教育課程編成も踏まえ、課題研究シラバスの開発に取り組んでいる。

静岡県総合教育センターが行う教育課程に関する研修会において、拠点校の実践例を報告する講座の設定を依頼しており、研修会等への参加者数については増加すると考える。

9 次年度以降の課題及び改善点

【本事業に関する管理機関の課題や改善点】

事業拠点校及び事業連携校における課題研究の実情を把握し、教育課程並びにシラバス等の開発を促進する必要がある。

その方策の一つとして、来年度からは、カリキュラムアドバイザーに外部人材を登用し、各校への定期的な訪問を依頼しながら、事業拠点校を中心とした情報共有をより進めていく。

【ALネットワークの課題や改善点】

(1) 「ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム」の設計・構築及び運営

静岡大学、事業拠点校及び県内事業連携校、大学課、ふじのくに地域・大学コンソーシアム担当者と協議し、試験的に事業拠点校及び事業連携校の生徒を対象に、大学の講義等を公開する。公開にあたっては、科目や内容だけでなく、講義形式やオンライン、集中講義等の多様な受講形態について検討する。

受講後の評価により、高校及び大学の両方の単位認定とすることができるよう、具体的方法を調査・研究を行う。

また、実施にあたり必要な事項に関する、静岡大学と管理機関との協定や学部・学科の専門教科の先取り履修・修得についても検討する。

(2) 「ふじのくにグローバルセミナー」の企画及び実施

ア 研究指定1年目の訪問成果を受け、拠点校・県内事業連携校の生徒派遣計画を立案

し、2021年3月にミネソタ州立大学へ派遣する。

派遣生徒は事前研修を兼ね、ミネソタ州立大学Gillian教授等によるSTEM研修を受講する。

そのための募集要項等の整備も行い、研究指定終了後も継続できる体制について検討する。

イ 派遣に伴う事前研修、事後研修に要する時間・内容等を踏まえ、生徒の単位を認定する仕組みを検討する。

ウ 事業拠点校における「STEM for SDGs」受講者、事業拠点校・連携校合同で実施するSTEM研修受講者の成果を校内・校外へ普及させる仕組みを検討する。

(3) カリキュラム開発

ア 拠点校

(ア) 「総合的な探究の時間」の1年次シラバス、評価方法・基準を見直し、2年次シラバス、評価方法・基準を新たに作成する。

全校で取り組む英語プレゼンテーションの効果的な指導方法について、元英語教員、ALTの活用方法等を研究する。

また、人事異動等により転入した教員を研修会やフォーラム等に派遣し、資質の向上を図る。

(イ) 令和2年度入学生の教育課程から学校設定教科「WWL」に「STEM for SDGs」「海外研修」を開設する。両科目とも、事前研修、現地研修（ベトナム、アメリカミネソタ州）、事後研修の成果を踏まえ、単位認定する。

(ロ) 海外の高校と同一又は関連あるテーマで実験・実習を行い、得られたデータを共有し、結果の違いやその原因等について、互いに議論し合える教材の開発に取り組む。また、情報交換ツールについても研究する。

イ 県内連携校

カリキュラムアドバイザー、課題研究指導委員会等を活用し、拠点校の先行例を研究し、自校の現状を踏まえた、文理融合型教育課程と課題探究シラバス開発に取り組む。

連携校における課題探究活動の中心となる教員を研修会やフォーラムに派遣し、資質の向上を図る。

(4) 周知・普及活動

ア フォーラム・成果報告会の実施

(ア) 「FALCon ディスカッションフォーラム」をモデルとし、高校生国際会議に繋がるプレ大会を実施する。

必要に応じて、国際会議参加を予定する海外高校教員の参加を招聘する。

(イ) 教科・科目横断型授業への転換を図るため、アメリカミネソタ州立大学教授等による静岡県内公立高校教員を対象としたSTEM研修を実施する。

(ロ) 探究活動を広げ、発表する機会を提供するため、「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」を実施する。

研究指定終了後も継続実施できるよう管理機関である県教育委員会の事業への移管も検討していく。

(エ) 静岡県高等学校長協会秋季研究大会について、事業概要、成果と課題等を報告し、大学等の先取り履修の進捗状況についても広報する。

イ 授業公開等

県内高校を対象に、初期指導、中間報告会、最終報告会等を公開するとともに、事業拠点校が開発した課題探究活動シラバス、評価方法・基準を静岡県総合教育センターの授業づくりデータベース等で公開する。

【研究開発にかかる課題や改善点】

(1) 評価

事業拠点校の実践例、文部科学省の示す「スーパーグローバルハイスクール事業検証に係る指標」を参考に、事業拠点校、事業連携校で共通に行える評価方法の開発に取り組む。

(2) 高校生国際会議

ア 組織づくり（各種委員会の開設）

「2021ふじのくに高校生国際会議実行委員会」を組織し、下部組織として、運営委員会、生徒実行委員会を設置し、定期的に各委員会を開催する。

イ 生徒実行委員間の情報共有・研修

高校生国際会議プレ大会参加者間の情報共有ツール、意見交換の場として開発するプラットフォームを生徒実行委員間の情報共有ツールとして改善・活用する。

ウ 視察

参考となる高校生国際会議等への教員及び生徒を派遣する。

(3) 研究指定終了後のALネットワークの継続と拡大

研究指定の成果と課題を踏まえ、研究指定期間中の事業について、次の観点から整理する。

ア 管理機関が維持・発展させるための事業

(ア) ALネットワーク

- ・ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム
大学等の先取り履修 など
- ・ふじのくにグローバルセミナー
海外研修 など

(イ) 上記(ア)に係る周知・評価・検証

イ 各高校（普通科高校）における実践

(イ) カリキュラム開発

- ・総合的な探究の時間における探究活動シラバス
- ・各高校の現状を踏まえた特色あるカリキュラム開発
- ・教科横断型・文理分断型教育課程の開発

(イ) 総業務量の調整とワークライフバランス

【担当者】

担当課	高校教育課	TEL	054-221-3147
氏名	佐藤 典幸	FAX	054-251-8685
職名	教育主査	E-mail	kyoui_koko@pref.shizuoka.lg.jp

第1章 管理機関の取組

1 評価委員会等諸会議

(1) 事業拠点校・事業連携校連絡会議

ア 日時 令和元年5月14日(火) 午前10時から正午まで

イ 場所 県立静岡高等学校

ウ 内容

- ・事業概要の確認
- ・各設置委員会の確認
- ・予算編成の確認
- ・各校課題研究の確認

(2) 第1回運営組織委員会

ア 日時 令和元年7月16日(火) 午前10時から正午まで

イ 場所 静岡県庁西館8階 教育委員会議室

ウ 内容

- ・ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム構築について
本県の高大連携の現状の確認(県立静岡東高等学校、県立浜松城北工業高等学校等)
- ・ふじのくにグローバル・セミナーについて
アメリカミネソタ州への教員視察の確認
海外インターンシップへの普通科高校の生徒の参加可能性を検討
- ・グローバルな社会課題研究について
各校での取組の共有

(3) 第2回運営組織委員会

ア 日時 令和元年12月10日(火) 午後1時30分から3時30分まで

イ 場所 静岡県庁西館8階 教育委員会議室

ウ 内容

- ・ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム構築について
静岡県立大学、静岡大学へのヒアリングを開始
- ・ふじのくにグローバル・セミナーについて
令和2年度アメリカミネソタ州への生徒派遣の確認
- ・グローバルな社会課題研究について
全国高校生フォーラム、静岡県グローバルポスターセッション大会の確認
高校生国際会議の情報共有

(4) 第3回運営組織委員会・第1回評価委員会(合同開催)

ア 日時 令和2年1月28日(火) 午前10時から正午まで

イ 場所 静岡県庁西館8階 教育委員会議室

ウ 内容

- ・ふじのくにアドバンスト・プレイスメント・システム構築について
オンライン授業を活用した静岡大学との連携の検討状況
- ・ふじのくにグローバル・セミナーについて
拠点校の取組の紹介
- ・グローバルな社会課題研究について
拠点校の取組の紹介
- ・評価委員による評価・指導・助言
各評価委員による評価表の記入等

2 海外研修

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構想支援事業STEM教育推進事業
ミネソタ州ミネアポリス、セントポール、オワトナ訪問 報告

(1) 日 程 令和元年8月4日(日)～8月9日(金)

(2) 訪問者 県立三島北高等学校 校長 齊藤 浩幸
講師 ONG KHAI MING
県立沼津東高等学校 教諭 戸嶋 優
県立静岡高等学校 教諭 甲斐 文子

(3) 報 告

ア 8月5日(月)

a E STEM Middle School 訪問

○9月開講の新しいタイプのミドルスクールで
環境STEMを扱う。

英語を母語としない生徒も入学可能で、机、椅子
の数も決まっておらず、生徒の要求に設備・
備品を整備していく。

○生徒が自ら設定した課題を解決できるように、
高大な敷地内に学校林を所有しており、集中的
または継続的に探究活動を行える学習環境を整
備している。



b UNIVERSITY OF MINNESOTA 訪問

Dean Professor Jean K. Quam との懇談

○ミネソタ州立大学の歴史や規模について説明を伺
い、日本人学生の頑張りについても話を聞いた。

○KHAI 先生による WWL 構想とミネソタ州立大学へ
協力等に関するプレゼンを行った。

○2020年、静岡県の教員へのSTEMプログラム研修
の実施の可能性について、ジリアン教授に打診し、好意的回答を得ることができた。



c Minnesota Department of Education 訪問

Doug Paulson Director との懇談

○州を挙げてSTEM教育に取り組む理由

① 医療・薬学系の会社が多く、人材を求めている。



- ② 教育委員会が「何故」を重視し、それに対する答えを自ら求める態度の育成を重視している。
- ③ 保護者が「何故」を重視している。高校生でも大学の講義を受講できるが、受講する科目と大学での専攻は別という考え方がある。

○STEM コーディネーター、Science コーディネーターの育成

教員経験を有する人材グループからコーディネーターを選ぶ。州としては基準だけを決め、校長等がその成果や市民からの評価をもとに採用している。

目指すところは地元の企業に優秀な人材を送ることであるが、「学びたい」から「生活に使えるもの・関わるもの」へ移行したことが実態である。データサイエンスにも注目が集まっている。

イ 8月6日(火)

a UNIVERSITY OF MINNESOTA STEMセンター訪問



ミネソタ州立大学 Gillian 教授に STEMセンターを案内していただいた。Tom Meagher Owatonna Public School STEM Coordinator、高校で指導している Marty、Benny にも加わっていただき、STEMの実践について意見交換した。



○Marty (物理担当)

10時間を1単元として、時間をかけながら指導している。まず、基礎を教え、生徒たちが知識を出し合い、自らの課題について形にしていく。プレゼンのようなパフォーマンステストでは個々の評価はできないので、面接を重視し、個人評価を行っている。

○Benny (生物担当)

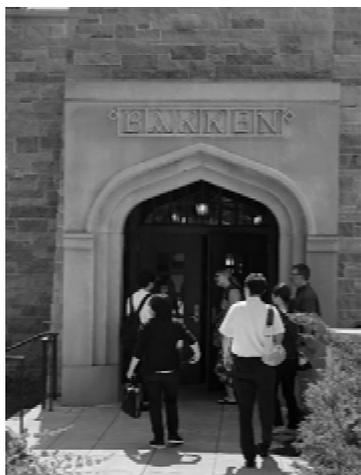
課題を設定し、解決に必要な要因を出し合いながら、学ぶべき・理解すべき基礎を押しさえる形で行っている。

○意見交換

アジアではSTEM教育が導入されつつあると聞くが、日本が遅れているわけではない。日本は理数教育に長け、高い資質能力を有する人材を輩出している。しかし総合的に学ぶことが少ない。文理選択だけでなく、物理・化学・生物・地学をカテゴリー化し、深く学ぶが、総合的に捉えることが少ない。

STEMにおいても、S(理科)は中心を成すが、T・E・Mを要素として加える視点が大切である。

b Bakken Museum 訪問



バックェンは1924年に生まれ、ミネアポリスで育ち、ミネソタ大学で電気工学の訓練を受けた。1949年、医療用電子機器の修理から始まったメドトロニックを共同設立し、すぐに機器の販売・改造、特殊用途機器の設計・生産を開始した。1957年心臓外科医と協力し、最初のウェアラブル、トランジスタ化ペースメーカーを開発した。

メーカーとなり、移植可能なポータブルペースメーカー、すなわち内部で着用することができ、患者が移動することを可能にするペースメーカーの製造とマーケティングを開始し、現在心臓ペースメーカーの世界最大のメーカーとなっている。

博物館は、2つの教室と子どもたちの科学プロジェクトと教員研修のためのワークショップ、展示エリア、図書館、コレクションを提供・公開している。

ウ 8月7日(水)

a Owatonna Middle School 訪問

Tom Meagher Owatonna Public School STEM Coordinator による学校案内

○9月完成を目指し製作中である、E(環境)STEMを实践する自作の教材園や機能的な教室を見学した。日本では良い昆虫とされているコガネムシがミネソタでは害虫となっている。このような視点で、協働で授業・研究ができると楽しいのではないかの提案もあった。

○サマーキャンプが行われており、生徒たちが水生生物の観察をテーマに、近隣の小川でフィールドワークに取り組んでいた。



b Owatonna Public Schools administrators との懇談

○KHAI 先生によるWWL 構想・高校生国際会議参加、学校間交流プログラムに関するプレゼンを行い、要望等を踏まえ可能性について意見交換を行った。

- ・「持続可能な開発目標 SDGs」に関する課題研究は行っていないが、課題解決型学習(PBL)を行う良い教材となると感じる。
- ・2021年3月の日本の高校生受け入れは可能であり、ホームステイも可能である。



(4) まとめ

ア STEM教育について

アメリカで展開されているSTEM教育は、莫大な予算を基盤にして、科学教育のパラダイムシフトが起こっている。試行錯誤を繰り返しながら、課題解決に向かう、Project Based Learningを展開するために、施設の整備、教員養成等に予算をかけている。

各地域（日本で言う市町レベル）で認定・採用されたSTEMコーディネーター、Scienceコーディネーターにそれぞれの授業実践に向け、予算、集まった寄付金の執行等についてかなりの裁量があり、その成果等を校長や地区の教育委員会が評価しており、まさにコーディネーターの力量が成否の鍵となっている。

さらに、Minnesota Department of Educationの訪問時Doug Paulson氏からミネソタ州の主産業（医療、薬学系）を支える人材を、STEM教育を通して育成するとの明確な回答が印象的であった。

イ 高校生の派遣（STEM体験）

2021年3月を中心に検討しているWWL拠点校・連携校生徒派遣については、ミネソタ大学、オワトナ公立学校での受け入れは可能との回答を受け、今後、県教委と連携し、日程、行程、要項等を作成していく。

なお、令和2年度の予算は年度末あるいは次年度初めになる予想から、派遣人数の決定はこの時期となると思われる。

ウ 高校生国際会議

2021年8月を中心に検討している高校生国際会議への参加については、中学から高校への切り替えの時期であるが、参加について前向きに検討するとの回答があった。

エ 教育課程上の位置づけ

拠点校では、学校設定科目「STEM for SDGs（仮称）」を設定し、日頃の課題探究活動とミネソタ訪問と連動させ、1単位認定する方向で検討を進める。

第2章 事業拠点校としての取組

1 課題探究シラバスの開発

(1) 概要

ア 学習の目標

探究の見方・考え方を働かせ、持続可能な開発に向けた課題に関わる総合的な学習を通して、自己の在り方生き方を考えながら、適切で論理的な課題の発見と解決ができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。

イ 科目の特色

a 知識及び技能

持続可能な開発に向けた課題に関わる探究の過程において、その解決に必要な広く深い教養、情報活用解析能力及び協働性を身に付けるとともに、地域や社会の特徴やよさ、そしてそれらが人々の関わりや協働によって支えられていることに気付く。

b 思考力・判断力・表現力

持続可能な開発に向けた課題と自分自身との関わりから、問いを見出し（課題発見力）、その解決に向けて現状を分析し、解決すべきことを見極め、仮説と解決策を立て（論理的構成力）、その結果をまとめ、自らの言葉で発表する力（情報発信力）を身に付ける。

c 学びに向かう力・人間性

持続可能な開発に向けた課題についての探究活動に、自己肯定感と批判的思考力をもって取り組むとともに、新たな課題や持続可能な社会を実現するための行動に果敢に且つ粘り強く取り組み（挑戦する姿勢・粘り強さ）、社会に貢献しようとする態度を育てる。

ウ 学習計画

月	単元名	指導項目	主な学習活動（指導内容）と評価のポイント	留意点
4	課題発見の準備	1 初期指導（2 h） 2 テーマ決定（3 h）	1 初期指導（全体） ・2年生によるプレゼンテーション ・SDGsに関するアクティビティ ・課題研究の概要 2 テーマ決定（個別） ・参考図書を利用し、課題研究テーマとなるSDGsを選択 →個人で取り組みたい研究テーマを検討	社会課題に関心を持ち、自分なりの理由をもって取り組みたい課題を定める。
5	課題研究テーマ設定	3 チーム作り（1 h） 4 問題解決の流れ・前半（1 h）	3 チーム作り（ゼミ・チーム） ・ゼミ確定 ・個人研究テーマが近いメンバーとチーム作り ・チームテーマ設定 4 問題解決の流れ・前半（チーム） ・課題研究の「ゴール」「現状」「原因」を整理（「問題解決の流れ・前半」シートの作成）	自分の意見を述べながらも他者の意見を聞き、他者と協働しながら作業を進める。

6	課題設定とフィールドワーク準備	5 問題解決の流れ・後半 (1 h) 6 チームテーマ発表 (1 h) 7 フィールドワーク準備 (2 h)	5 問題解決の流れ・後半 (チーム) ・課題研究の「課題」「解決策」を整理 (セッションシートの作成) 6 チームテーマ発表 (ゼミ) ・チームテーマと問題解決の流れを発表 7 フィールドワーク準備 (チーム) ・作業訪問先の選択、実験内容、アンケート作成等	アイデアを具体化するために、様々な意見を出し合える雰囲気づくりを心掛ける。
7	フィールドワーク	8 フィールドワーク準備 (2 h) 9 フィールドワーク	8 フィールドワーク準備 (チーム) ・アンケート作成とデータ処理について (統計調査課の県政出前講座を利用) ・フィールドワーク計画 9 フィールドワーク (チーム) ・フィールドワークの実施	フィールドワーク先には、ゼミ担当教員の指示を仰ぎ、丁寧に依頼事項を伝える等、礼儀を忘れない。
9	課題研究中間発表準備	10 フィールドワークまとめ (1 h) 11 紙芝居プレゼン作成 (4 h)	10 フィールドワークまとめ (チーム) ・フィールドワークの内容を反映させたセッションシートの完成 11 紙芝居プレゼン作成 (チーム) ・セッションシートに基づき紙芝居プレゼン作成 ・紙芝居プレゼンのゼミ内発表 ・レジュメの作成	チームの課題研究内容を、他者に伝えるためには、どうすればよいか考え工夫する。
10	チーム課題研究中間発表	12 紙芝居プレゼン完成 (2 h) 13 中間発表会 (1 h)	12 紙芝居プレゼン完成 (チーム) ・紙芝居プレゼンとレジュメの完成 ・プレゼンテーション準備 13 中間発表会 (複数ゼミ) ・複数のテーマ集団による紙芝居プレゼンの発表会 ・振り返り	的確な説明ができるよう研究内容を丁寧に見直す。／他チームからもらった意見を活かす方向で考える。
11	チーム課題研究深化	14 チーム課題研究深化 (1 h) 15 ポスター作成 (3 h)	14 チーム課題研究深化 (チーム) ・中間発表会振り返り→課題の深化・見直し ・ (必要であれば) フィールドワーク 15 ポスター作成 (チーム) ・ポスターセッション説明 ・ポスター作成準備 (記載項目の精選、ビジュアル素材作成等)	自らの研究も批判的に見直す。／チームで協働し、研究の深化と同時に、ポスターに必要な情報を精選する。

12	チーム 課題研 究発表 準備	16 ポスター セッション準 備 (1 h)	16 ポスターセッション準備 (チーム) ・ポスター作成 ・レジュメ作成 ・説明事項確認／想定問答集作成	冬季休業中にで きることを分担 し、作業が遅れ ないように留意 する。
1	チーム 課題研 究発表	16 ポスター セッション準 備 (2 h) 17 ポスター セッションリ ハーサル (1 h)	16 ポスターセッション準備 (12月から継続) 17 ポスターセッションリハーサル (複数ゼミ) ・違うゼミのメンバーが入ったポスターセッション リハーサル ・振り返りと大会への最終準備	一年間の集大成 として見せるべ きものを選び、 わかりやすいポ スター作りに努 める。
2	個人レ ポート 2年次 課題研 究に向 けて	18 ポスター セッション大 会 (1 h) 19 個人レポ ート作成 (4 h) 20 2年次課 題研究に向 けて (1 h)	18 ポスターセッション大会 (全体) 19 個人レポート作成 (ゼミ・個人) ・ポスターセッション振り返り→チーム課題研究を 個人テーマに回帰させレポート作成 ・レポートの書き方指導 20 2年次課題研究に向けて (ゼミ指導・個人) ・1年次課題研究 (チーム・個人) を踏まえた2年 次課題研究テーマ策定	4月から課題意 識がどのように 変わったかを意 識しながら、個 人レポートをま とめる。

エ 評価の観点

広く深い教養	現代社会の諸問題を理解するための多様な背景と手立てに関する知識がある
協働性	話し合いや企画調整等、チームでの活動ができる
情報活用・解析能力	データや資料を分析し、論証に活用できる
課題発見力	知りえた情報から課題を見つけ、自らの問題と繋げられる
情報発信力	自らの思考やチームのアイデアを他者にわかりやすく伝えられる
論理的構成力	課題発見から解決策の提案に至るまで論理的に組み立てられる
批判的思考力	知的好奇心に溢れ、自己／他者の考えや意見に興味や関心を持ち、その考えや意見を深化させる問いを抱いている
自己肯定感	自らの思考や意見に自信を持って、主体的且つ肯定的に取り組んでいる
挑戦する姿勢 粘り強さ	失敗や躓きに臆することなく新たな課題に果敢に挑んでいる 地道で先の見えない作業でも粘り強く取り組んでいる

(評価の対象)

- ・ レジュメ、紙芝居プレゼン、ポスター(チーム作品)
- ・ プレゼン・セッション時相互評価・自己評価(振り返りシート)
- ・ グループディスカッション、アクティビティ(観察)
- ・ 個人レポート、フィールドワーク(レポート)
これらを総合的に判断して評価する。

(2) 初期指導

ア SDGs と「課題解決の流れ」の理解

初期指導は学年全体指導の形態を取り、2時限分を配当した。国連広報センターの動画視聴を通してSDGsの概念の理解を進め、特に不可分性・普遍性という特徴に注目を促した。さらに、SGHの学校設定科目でも活用していた、NGOプロジェクトWETの教材「重大な過ち」を用いたグループワークにより、課題探究における「課題解決の流れ」に則った研究の進め方を指導した。また、過年度生の研究内容を複数紹介し、課題探究とは、小中学校までに行ってきたような単なる調べ学習ではなく、目指すべきはアクションを伴った研究であることを伝え、ゴールのイメージを共有することができた。



イ チームビルディング

あらゆる問題にはたくさんの利害関係者がおり、そのなかからハッピーにしたい人、すなわちターゲットを絞り込むことによって課題を見つける演習を行った。Think the Earthによる「未来を変える目標SDGsアイデアブック」を用いて、すでに成功している様々なアクションが、どんな人をターゲットにしたものかを読み解いた。

生徒たちはこれまでの初期指導を通じて関心を持ったSDGsの1番から6番を登録し、クラス横断型のグループを作った。各グループには、1年部の教員2～3人がティームティーチングで指導を行うこととした。生徒はグループごとに集まり、さらにそこで個人が取り組みたいと思っている課題を書き出し、プラカードを作った。このプラカードを言葉を発せずに掲げ持ち、お互いのプラカードを見合せて、似たようなターゲットや課題内容を持つ5人程度のチームを作った。

SDGsゴールごとのグループと、研究を進める単位であるチームごとにClassiの校内グループを作成し、振り返りアンケートを配信したり、生徒同士の研究の進捗状況が確認できる場とした。調べたこと記録したり、アクションを行う様子を撮影した画像を記録することにも活用した。

ウ スキル習得を目指す帯活動の導入

課題探究を進めるうえで、個々の生徒に身に付けてほしいスキルの習得を目指し、授業の最初に数分間の帯活動を設定した。短い時間で、繰り返し、かつ楽しくテンポよく行えるようデザインしている。正解がないことに慣れ、アイデアをたくさん出し、それを認め合う姿勢の涵養も狙いである。

帯活動の種類	内容	習得を目指すスキル
わたしはあまのじゃく	多くの人が好ましく思うこと（例：お年玉）の難点を述べたり、多くの人が嫌うこと（例：ゴキブリ）のすばらしさを述べたりする。	相手を納得させる「理由」を述べ、論理的に研究をまとめる。
キャット&チョコレート （カードゲームを応用）	提示されたピンチに対して、3つのリソースを用いた解決策を考える。	限られたリソースで柔軟に「解決策」を検討する。
昔話法廷（NHK Eテレ番組を応用）	昔話の登場人物の行為が有罪となるかどうかを判断するための質問を考え、発問し合う。	より深い背景を探るための問いを立て「質問」をする。

(3) 外部人材の活用

ア 県政出前講座

静岡県経営管理部 ICT 推進局統計利用課の天野佑紀氏を講師に招き、7月10日に1年生全員を対象に、「統計出前講座」を実施した。夏休みに計画しているフィールドワークを前に、アンケート調査で得られた情報をどのように扱ったらよいのかなど基本的な統計調査の考え方を学んだ。



イ 専門家による授業支援

10月23日と12月11日に、ゴールごとに専門家を招き、「課題解決の流れ」に則った研究がなされているかどうか、アクションが適切に設定されているかどうかについての指導を受けた。毎回の授業で指導する教員が、専門分野について自信をもって指導できない部分についての支援は有効であり、停滞しがちなタイミングで支援を受けることにより研究が進むこととなった。



専門家（敬称略）	対応 SDGs グループ
Water Aid Japan 高橋郁	Goal 1（貧困をなくそう）および Goal 6（安全な水とトイレを世界中に）
JICA 安達一郎	
アクアスフィア 橋本淳司	

静岡県立大学短期大学部 松浦崇准教授 静岡県立大学大学院国際関係学研究科附属 CEGLOS 望月良憲客員研究員	Goal 2 (飢餓をゼロに)
静岡県立大学経営情報学部 東野定律教授	Goal 3 (すべての人に健康と福祉を)
静岡大学教育学部 河崎美保准教授 静岡大学教育学部 熊野善介教授	Goal 4 (質の高い教育をみんなに)
静岡県立大学経営情報学部 国保祥子准教授 同ゼミ生経営情報学科4年 諸星桃夏	Goal 5 (ジェンダー平等を実現しよう)

Classi のアンケート機能による振り返りでは、外部指導者の助言について、73%の生徒が自分のチームの研究に「おおいに役立ちそう」と回答しており、その理由は、「私たちが忘れていた、本人として考え行動することを今一度私たちに教えてくださったから。」「自分たちが考えていたアクションとはまた違った目線で別のアクションプランのアドバイスをくれた。」などの回答があった。



(4) 紙芝居プレゼン

研究の途中経過を発表する機会として、10月に行った紙芝居プレゼンでは、同じゴールの違うチームがそれぞれに課題に向けて違うアプローチをしていることを改めて確認する機会となった。プレゼンの技術は未熟で、分担して準備を進めた結果チーム内で用語が統一されなかったり重複した内容があることに気づくチームや、アクションプランまでが具体的になっているチームとの差を認識して、自らの研究を振り返ることとなったチームが多かった。



(5) 日本語ポスターセッション大会

2月3日に行われた校内日本語ポスターセッション大会は、「問題解決の流れ」をアクションまで実行し、考察までまとめた研究の発表を行った。2月8日に行われた本校主催静岡県グローバル課題研究プレゼンテーション大会の代表選出するための予選という位置づけである。

(6) 生徒によるアンケート等の結果と分析

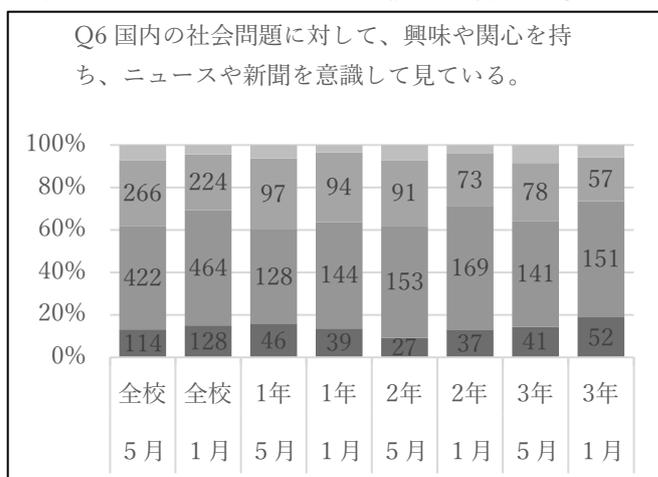
ア 課題探究に関する意識調査アンケート

5月と1月に、全校生徒を対象に課題探究に関する意識調査を行った。同じ質問をし、変化を分析した。回答は記述の2問を除き、「とてもそう思う・とても当てはまる」「そう思う・当てはまる」「あまりそう思わない・あまり当てはまらない」「そう思わない・当てはまらない」の4段階で自分の状態を選ぶものである。回答はClassi アンケートにより回収した。

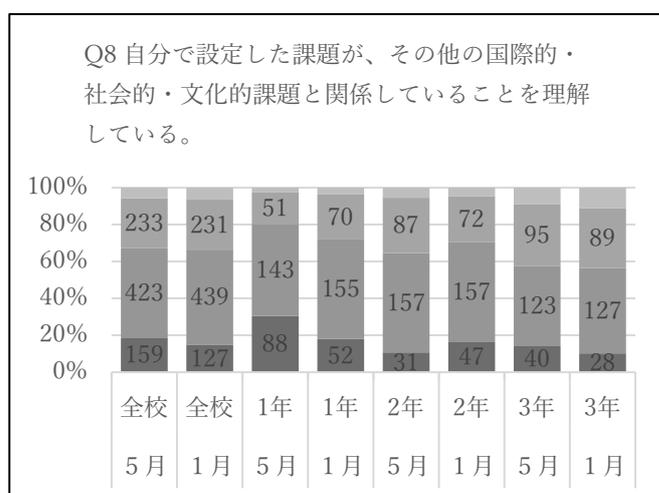
(質問項目) 1番目の質問は、アンケートの回答の取り扱いの説明を理解したかどうかの質問。

2	社会に貢献する活動や、自分を高めるための活動（読書等も含む）に積極的に取り組みたい。
3	高校在学中に、留学や、海外への研修に行きたい。
4	高校卒業後、留学や、海外への研修に行きたい。（実際すでに行った、行く計画があるという人は、「非常にそう思う・非常に当てはまる」を選んでください。）
5	将来、国際関係や英語を使う職業に就きたい。
6	国内の社会問題に対して、興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見ている。
7	国外の社会問題に対して、興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見ている。
8	自分で設定した課題が、その他の国際的・社会的・文化的課題と関係していることを理解している。
9	課題探究における問題解決の流れを、ほかの学習や日常といった様々な場面でも応用することができる。
10	考える力が身についている。（洞察力、発想力、論理力）
11	課題解決をしていくうえで、物事を多面的に見る姿勢が身についている。
12	自分の考えを同じチームの仲間に理解できるように伝え、研究に貢献する力が身についている。
13	日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身についている。（レポート作成、プレゼンテーション）
14	周囲と協力して取り組む姿勢が身に付いている。（協調性、リーダーシップ）
15	学習に対して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身についている。
16	学習以外のことに対して、自分から意欲的に取り組む姿勢が身についている。（自主性、やる気、挑戦心）
17	（自由記述）あなたが思うイノベティブなグローバル人材とは、どのような人ですか。
18	（自由記述）16番で記述したような人あなた自身になるためには、どのような行動や考えが必要だと思いますか。

質問6では、「国内の社会問題に対して、興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見ている」に対し、「とてもそう思う・とても当てはまる」と「そう思う・当てはまる」がどの学年でも5月に比べて1月の値が上昇した。



しかし一方で、「自分で設定した課題が、その他の国際的・社会的・文化的課題と関係していることを理解している」という質問8に対しては、2年生でのみ5月から1月にかけてやや上昇が見られるものの、全体的な傾向としては5月より1月の値が低く、また学年が進行するにつれて値が低くなっている。身近な問題に関心を持ちつつも、それを「ジブンゴト」として意識し、学習に有機的に結びつける力の伸長に課題があると言える。



イ 論理的思考力

全校生徒を対象に、WWL 推進室で作問した「論理的思考力」を測るテストを9月10日にClassi上で実施した。朝読書の時間の10分間を解答時間とし、回線不良などで解答できない生徒は紙媒体で解答を提出した。論理的思考力については多くの研究がなされているが、WWL 推進室では教育活動の狙いを踏まえ、論理的思考力を「課題解決の流れに沿って事象を捉えることができる力」と考え、作問した。

<p>大問 1 (1)～(6)</p>	<p>6 題。課題探究で身に着けることを目指す「問題解決の流れ」の理解を測る問題。 (一部抜粋)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>次の選択肢ア～エは SDGs の1～6のゴールに関する事例です。①ハッピーな状況(ゴールが達成された状況)、②現状分析、③解決策、④アクションの順番になるように並べ替えなさい。</p> </div> <p>設問 1(配点 10)</p> <p>SDGs Goal 1について、①ハッピーな状況(ゴールが達成された状況)、②現状分析、③解決策、④アクション、の順番に並べ替えなさい。</p> <p>ア お寺に残っているお供えを配る イ 日本の貧困の子供に十分な食事を与える ウ 日本の子供の7人に1人が貧困である エ 消費されない食料を利用する 正答 イウエア</p> <p>設問 2(配点 10)</p> <p>SDGs Goal 2について、①ハッピーな状況(ゴールが達成された状況)、②現状分析、③解決策、④アクション、の順番に並べ替えなさい。</p> <p>ア バランスのとれた食事を採るために食事の質を改善する イ 栄養バランスの取れた簡単なレシピがわかるようにする ウ 食べ物の量はあがるが栄養が偏っている食事ばかりしている エ 継続できるよう調理方法を簡単にしたメニューブックを作って配布する 正答 アウイエ</p>
<p>大問 2 (7)～(10)</p>	<p>4 題。フィールドワークの適切な計画実施ができるかどうかの知識を問う正誤問題。(一部抜粋)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>課題解決をするうえで、フィールドワークは重要な活動です。フィールドワークについて次の内容が適切であるかどうか答えなさい。</p> </div> <p>設問 1(配点 10)</p> <p>身近な人に話を聞くことが大切なので、ジェンダー問題についてどう思うか、チームメンバー全員のお母さんにインタビューすることにした。 正答 ×</p> <p>設問 2(配点 10)</p> <p>フィールドワーク先に連絡を取る際、最初はメールよりも直接話ができる電話が良い。 正答 ○</p>

以下の解答分析表の通り、概ねどの学年でも、すべての設問において高い正答率であり、大きな差は見られなかったが、大問 1-(2) (上の表参照) では、初めての課題研究がまだ途中である 1 年生は正答率が 70%を割り、既に研究を 1 つ完了させた上級生と少し差が見られた。また、大問 2-(1)は、7月に行われた静岡県経営管理部 ICT 推進局統計利用課による「統計出前講座」県政出前講座を受けた 1 年生の正解率の方が、昨年この講座を受けていない 2 年生を大きく上回った。

設問	1年			2年			3年		
	解答数	正答数	正答率	解答数	正答数	正答率	解答数	正答数	正答率
1_1	287	249	86.8%	291	258	88.7%	278	231	83.1%
1_2	287	199	69.3%	291	217	74.6%	278	197	70.9%
1_3	287	257	89.5%	291	276	94.8%	278	237	85.3%
1_4	287	229	79.8%	291	246	84.5%	278	219	78.8%
1_5	287	244	85.0%	291	258	88.7%	278	229	82.4%
1_6	287	254	88.5%	291	270	92.8%	278	239	86.0%
2_1	287	202	70.4%	291	182	62.5%	278	199	71.6%
2_2	287	203	70.7%	291	239	82.1%	278	223	80.2%
2_3	287	251	87.5%	291	248	85.2%	278	235	84.5%
2_4	287	224	78.0%	291	246	84.5%	278	248	89.2%
合計	2870	2312	80.6%	2910	2440	83.8%	2780	2257	81.2%

(7) 海外研修・修学旅行

ア ベトナム研修

SGH の 2 年目より開始した、希望者によるベトナム研修旅行は今年度 5 回目を迎えた。参加生徒は「総合的な探究の時間」の研究テーマで「SDGs 1 番 貧困」「SDGs 6 番 安全な水の確保」を選ぶこととし、過年度に訪問先として開発した水に関する施設（水資源機構）や JICA などを今年度の視察訪問先に盛り込んだ。参加者はこれまでと異なり、参加者だけがチームメンバーとなって進める研究ではなく、「総合的な探究の時間」においてそれぞれが所属するチームの研究に資するよう、現地研修を行った。

日程	令和元年 8 月 19 日（月）～23 日（金）
参加者	生徒：1 年生希望者 6 名（男子 4 名、女子 2 名） 引率教員：菊地正博教頭、中島由美教諭
費用	生徒 1 人当たり：164,860 円（うち生徒自己負担額 40,070 円）
[1 日目]	移動日（三島駅～羽田～ハノイ）
[2 日目]	<ul style="list-style-type: none"> ・JICA ハノイ事務所 小林将也様より、具体的な案件の紹介を通じ、プロジェクトとして成功させるまでのプロセスと、二国間支援の歴史と実態についてブリーフィングを受けた。持続可能な開発につなげるプロジェクトを展開し、支援国・被支援国両者にとってウィンウィンの関係となるためには、現地のニーズを丁寧に調査することが必要という説明に、参加生徒は課題研究に取り組む姿勢のヒントを得ていた。



・ JICA 海外ボランティア活動地である、**児童保護局児童心理療法相談所**では、特別支援学校の現職教員である山口隊員が、障害児のとらえ方が日本社会とベトナム社会では異なることに配慮して、教具を工夫して開発している様子を視察した。



・ **バッチャン村の伝統工芸体験**では、村の住人のほとんどがバッチャン焼きに関わる生活をしている産業構造や、水利を生かして発展してきた様子について説明を受け、生徒たちも絵付けに挑戦した。



[3日目]

・ 毎年水資源大学で本校の研修旅行を受け入れてくださっていたグエン・カオ・ドン教授が、政府機関である**水資源機構**に移籍した後の初めての訪問となった今年も、ハノイおよびベトナムの治水の歴史について生徒に英語でレクチャーをしてくださった。水源を他国に持つ大河を抱えるため、治水事業は単純ではないということや、洪水の予報システムの開発に関わる最先端事業について学ぶことができた。



・ ベトナムの財閥により経営されている**ヴィン高校**を訪問し、生徒会の生徒たちと交流した。地下のプールや3Dプリンタを備えたラボなど、校内の施設も生徒が案内してくれた。昨年はオンラインのみの交流であったが、今年は実際に生徒を派遣しての交流が実現した。本校生徒は英語で三島や日本文化についてプレゼンを行った。私立の学校であることから、政府による厳しい審査を受けずに交流事業に対して今後も柔軟な対応が期待できることが魅力であり、2年後の高校生国際会議への生徒の派遣についても前向きに検討するという回答を得た。



・ ホン河（ソンコイ河）の流域という地形から、昔から何度も洪水被害に見舞われてきたハノイだが、その豊富な水を生かし、農業も栄えてきた。水にまつわる伝説や農作業の日常をモチーフにした演目が人気の**水上人形劇**を鑑賞し、水をめぐる歴史的・文化的側面についても理解を深めた。

[4日目]

・毎年研修旅行を受け入れ、生徒との交流を続けている**チューバンアン高校**では、英語の授業に参加し、英語のプレゼンと、折り紙のミニ講習会を行った。機器の不具合があったが、その間も生徒は自分たちの名前の漢字を英語で紹介して場をつなぎ、本校生徒にもチューバンアン生徒にも多くの笑顔が見られた。



・2つの小グループに分かれ、ハノイ旧市街地を自由散策する**市内フィールドワーク**を行った。観光客向けに開発されている商業地区の奥にある、ハノイ市民の食事情を支える市場まで足を延ばしたり、ベトナム戦争時の空爆に標的とならなかったとされるハノイ大聖堂の内部に入り、数少ないキリスト教徒もベトナムに息づいていることを感じた生徒もいた。

[5日目] 移動日 (ハノイ～羽田～三島駅)

報告会等	9月25日：協賛企業3社に対して実施 10月29日：図書委員会生徒および希望生徒に対して実施 (せせらぎ講座) 11月30日：コミュニティFMボイス・キュー番組「ウォータービジョン」出演
------	---

(生徒感想)

- ・研修を通して積極的に動くことはほんとうに大切だと思いました。質問する場面や自分から話す場面が多かったので良い経験になりました。自分の英語が伝わったことも嬉しかったです。また、JICA 事務所を訪れたことで探究のテーマに対する意識も変わりました。今までは水を綺麗にするための方法を中心に考えていたけれどほかの視点からも考えられるようにしたいです。
- ・ベトナム研修で学んだことは、考えるよりも行動することの方が大切であるということ。特に JICA の山口さんや、小林さんは海外で活躍したいだとか子どもの役に立ちたいという想いを胸に実際に行動に移すことができるということはとてもすごいことだと思った。また、現地の高校生の英語力はとても高かったから自分の英語に対する向上心も持つことができたと思う。現地の方々は日本語を話すことができる人もいたので自分も他の言語にも興味を持っていきたいと思う。
- ・ベトナムの高校生との交流は自分にたくさんいい刺激を与えてくれたと思う。ベトナムの高校生は英語がほぼペラペラで自分ももっと英語の勉強を頑張ろうと感じたのと、他の国の言葉にも興味を持つことができた。フェイスブックなどでベトナムの高校生とつながることができたので、交流を深めていきたいです。

イ シンガポール修学旅行における Jurong West Secondary School との交流

本校では、2年次にシンガポール修学旅行を実施し、グローバル・マインドの醸成、社会問題等への意識高揚、英語力の伸長等を目的に、現地でのフィールドワーク等を実施している。2017年度からは、現地校 Jurong West Secondary School（以下、JWSS）を1クラスが訪問し、生徒間交流・教員間交流をとおして、相互理解を深めてきた。

2019年度は、例年の生徒間交流等に加え、2021年度に実施予定である高校生国際会議への参加依頼を目的に、両校の管理職を交えた協議の場を設定した。

- a 参加者（三島北高校）高橋副校長、中山教諭、神谷養護教諭
（JWSS）Michael Muhunthan 校長、Arthur Ngoh 副校長

b 内 容

- ① WWL 事業概要説明
- ② 2021 高校生国際会議の説明
- ③ 質疑応答
- ④ 両校の情報交換



c 成 果

JWSS は、Applied Learning Programme **【三島北高校からの WWL 事業概要説明プレゼン】** (ALP) という教育活動に取り組んでおり、生活に役立つアプリの開発、環境問題解決に向けた啓蒙映像の作成等を行っている。SDGs をテーマとした三島北高校 WWL の教育活動と親和性が高いことから、2021 年の高校生国際会議への参加を前向きに検討するとの回答が得られ、今後引き続き協議を進めることとなり、次回は 11 月の JWSS の来日時に打合せを行うこととした。

d 2019 年 11 月 13 日・14 日 JWSS 海外研修班による三島北高校訪問

JWSS は生徒の国際感覚を磨くことを目的とし、海外研修を実施している。そのうち日本を研修先として選択した生徒が、研修の一環として三島北高校を訪問し、生徒間交流を行っている。2019 年度の交流事業の概要は以下の通り。

【日時】

令和元年 11 月 13 日（水）午前 9 時 20 分～午後 1 時 10 分

令和元年 11 月 14 日（木）午前 9 時 20 分～午前 11 時 40 分

【訪問者及び人数】

生徒約 16 名 引率教員 Mr. Teo Eng Tong、Ms. Ho Li Yi

【内容】

13 日（水）学校紹介、校内見学・記念撮影等、コミュニケーション英語授業参加、和装体験他、昼食準備・交流昼食会

14 日（木）授業参加、管理職懇談（校長・副校長、教頭、WWL 推進室員）、華道体験

【成果】

例年は生徒間交流に止まっていたが、高校生国際会議への参加に向けた具体的な協議をとおして、教員同士も相互理解を深めることができた。SDGs をテーマとした探究活動は、世界の教育活動を結び付け、生徒間・教員間の交流を促進するということが実感できた。



【管理職懇談後の記念撮影】

(8) 留学生受入実績

プログラム	アジア高校生架け橋プロジェクト	JAAC インバウンド・プログラム
期間	令和元年9月2日～令和2年3月19日	令和元年9月2日～令和2年6月
出身国	タイ	デンマーク
性別・年齢	女・17歳	女・16歳
所属	2年生文系特進クラス	1年生
授業以外の活動など	国際交流部の活動に参加し、英語ディベートについて積極的に学んだ。 「全国高校生フォーラム」の英語セッションに参加した。	弓道部の活動に参加し、熱心に練習し技術を習得した。
第1回日本語プレゼンテーション 10月10日	 <p>タイの伝統的な水かけ祭り「ソングラーン」を紹介した。</p>	 <p>デンマークの童話作家アンデルセンを紹介した。</p>
第2回日本語プレゼンテーション 12月6日	 <p>タイの新年の迎え方を紹介した。</p>	 <p>デンマークのクリスマスの祝い方を紹介した。</p>

(第3回日本語プレゼンテーションを2月末に予定)

(9) 次年度へ向けて

令和2年度は、「総合的な探究の時間」が1年生と2年生の2学年で同じ週時程で同時に展開する。

ア チームの単位

異なるクラスの生徒同士週1回の授業で顔を合わせるだけでは、研究を自主的にチーム内で進める環境を作ることが困難であったため、次年度はホームルームを横断せず、同じホームルーム内でSDGsのゴールエリア（高校生国際会議のグランドテーマと共通）ごとにチームを組織する。チームは、同じSDGsゴールエリアの他クラスのチームと共に指導教員の元で授業時は活動することとするが、節目となる発表等はホームルーム単位で行うこととし、異なるSDGsゴールエリアを研究するチームと学び合う機会も作る。

イ スマホの利用のタイミング

スマホを利用して良い授業の回を指定してコントロールする。学校所有のパソコンを1学年（令和2年度からは2学年）が同時に使えるほど数がなく、生徒個人のスマホを利用した調べ学習を認めていたが、授業内で個々にスマホを使って調べることにより終始する生徒が散見され、チーム内での協働を阻害していたため。

ウ 専門家の支援

1学期に課題を設定する時点で専門家の支援を入れることにより、研究を深化させ加速する。

エ ティーム・ティーチング体制

ホームルーム単位での授業は担任と副担任、エリアごとの授業は別の複数の教員によるティームティーチングを行うことにより、生徒がより多くの教員の指導を受けることができる。

オ 発表の機会

発表の機会を励みに思う生徒が多いため、オープンスクールでの全チームの発表を検討する。

カ 学年間の学び合い

2年生が1年生の発表を聞いてアドバイスをしたり、1年生が2年生の発表を聞いて手法を学んだりする機会を作る。

2 英語教育コアスクール事業

本校は、静岡県教育委員会「英語教育コアスクール」に指定され、平成30年度から3年間、「英語でやりとりする力」を伸ばさせる指導法・評価法・体制づくりに向けて」をテーマに授業改善及び各種事業の実施に取り組んでいる。授業改善に関しては、(株)アルクと共同で開発した言語機能別発話訓練シートを用いて授業内帯活動を実施した。また、授業での発話活動の到達度を測る Proficiency Test の実施方法及び評価基準を検討し、英語で話す力の評価法を確立した。その他、TOEFL iBT 対策講座、TOEIC 対策講座、高校生英語プレゼンテーション大会等の事業も実施し、生徒の英語学習意欲の向上を図った。以下が各事業の詳細である。

(1) 言語機能別スピーキング活動及びProficiency Test の実施

ア 授業内での言語機能別スピーキング活動プログラムの開発

授業内での言語活動を通じて、生徒が発話量や文構造等を意識しつつ即興で発話する力をつけられるよう、「描写」「理由付け」「発問」等の言語機能別言語活動メニューを開発するとともに、評価基準の原案作成に取り組んだ。

平成30年7月2日(月)及び8月29日(水)の事前担当者会議では、(株)アルクからスピーキングテストの評価官を招聘し、評価官による講義や評価方法に関するディスカッションを行い、発問や評価方法等に関して協議した。

【参加者】1・2年部英語科教員、アルク担当者、管理職

【内容】言語機能とその評価に関する講義

学習活動及びテスト実施に関する協議

授業内での言語活動で使用するタスクの確認

言語活動及びテストの評価観点に関する協議

ワークシート原案作成



【(株)アルクと本校教員による担当者会議】

イ 授業内でのスピーキング帯活動の実施

平成30年度の2学期以降、1・2年生は英語の授業内で、言語機能別ワークシートを活用した帯活動に取り組んでいる。授業内で5分間の Speaking 活動を毎回実施し、英語による質問・応答及び簡単な自己評価をその場で行っている。令和元年度は、1年生が「叙述」・「描写」・「理由付け」・「質問」の4つの言語機能に関する活動に取り組み、2年生は「賛否」・「意見を述べる」・「説明する」・「提案」・「是非を論じる」の5つの言語機能に取り組んだ。

ウ Proficiency Test の実施

授業内で取り組んだ言語機能の定着度を測るため、1・2年生は全クラスで各学期末に Proficiency Test を実施している。パソコン室でヘッドセットを使用し、解答音声ファイルを保存し、後日、音声ファイル全員分を採点し、成績に組み入れている。なお、採点に当たり採点者間のブレがないよう、部分的にアルクの研究員にも採点を依頼し、オンライン会議で本校教員と採点結果のズレに関して、擦り合わせを行っている。



【パソコン室での Proficiency Test の様子】

(2) 「TOEFL iBT スキルアップセミナー at 三島北高校」

海外大学への進学、国内大学から協定先海外大学への留学、日本の大学入学者選抜等に活用される TOEFL iBT の対策講座を行った。また、教員も講座を受講し、自らの英語力向上、指導力向上を目指した。

【実施日】 令和元年8月13日（火）

【講師】 TOEFL テスト公認トレーナー 鬼頭和也 氏（城西大学 助教）

【参加者】 生徒 22 名（1 年生：8 名、2 年生：14 名）、教員 3 名

※生徒は、英検準 2 級以上取得者を対象に募集



【講師による問題への取り組み方等の解説】



【ネット接続 PC で、実際の iBT 対策問題に挑戦】

【生徒アンケートより】

- ・長文の読み方、ライティングやスピーキングのコツが分かり、今後に活かせると思う。
- ・苦手な単語の便利なサイトを教えてもらえてよかった。

(3) 「TOEIC 対策講座」

大学生の就職活動、海外大学への進学、国内大学から協定先の海外大学への留学、日本の大学入学者選抜等に活用される TOEIC の対策講座を行い、生徒が将来の受験・留学・就職等に対応する英語力を身に付ける一助とした。

【実施日】 令和元年12月26日（木）・27日（金）

【講師】 英語インストラクター 清水 昌代 氏

【参加者】 生徒 18 名（1 年生：15 名、2 年生：2 名、3 年生：1 名）

【生徒アンケートより】

- ・リスニングやノート taking のやり方について有効な方法を知ることができて良かった。
- ・自分の単語力のなさを痛感したので、これからの課題にします。

(4) 三北杯高校生英語プレゼンテーション大会

高校生が、自らの関心に基づき調べたり研究したりした結果について、プレゼンテーションソフトの利用により英語で説得力を持って発表する「訴求力」を育てること目的として開催した。

【実施予定日】 令和 2 年 3 月 24 日（火）

【参加予定校】 三島北、韮山、三島長陵、藤枝東、加藤学園暁秀から合計 7 チームが参加
（昨年度の第 1 回より参加校数は 2 校増加）

【審査員】 静岡大学教育学部 矢野教授、県教委 ALT、市内高校 ALT

(5) 平成 30 年度入学生の実績

【アンケート結果より】

英語教育コアスクールの取組を開始した平成 30 年度入学生を対象として、平成 30 年 7 月の取組開始時及び平成 31 年 3 月の学年末の時点で、「英語でやりとりすることができますか」というアンケートを行った。結果は以下のとおりである。

	よくできる	できる	あまりできない	全くできない
H30. 7 月	1.4%	24.6%	66.2%	7.8%
H31. 3 月	4.4%	80.9%	13.0%	1.7%

取組開始当初は、「あまりできない」・「全くできない」という回答が 74%を占めていたのに対し、学年末では、「よくできる」・「できる」の肯定的な回答が 85.3%を占めた。1 年次の取組を通じて、生徒の英語でやりとりをすることに対する抵抗感が減少し、自信をつけた様子が見える。

【生徒の音声解答に見られる変化】

以下は、ある生徒の取組開始当初（平成 30 年 11 月）と学年末（平成 31 年 3 月）に行った Proficiency Test 音声ファイルのスク립トである。両者を比較すると、解答の質に向上が認められる。

(11 月の問題 : 「Please talk about your ideal friend.」)

My ideal friend is a person who is kind and also ... she keeps on doing effect, And ...

発話量・情報量が乏しく、内容が深められていない。言いよどみも多く、語彙のミスもある。

(3 月の問題 : 「When you become an adult, where would you like to live and why?」)

I'd like live in Italy because when I was a child, I watched the movie of Italy. And I like the people, food, culture, and scene in Italy, so I want to enjoy the life in Italy.

主張とその理由が具体的に表現され、内容的に深まりがある。文法、語彙ともに問題なし。

評価の際には①発話量、②正確さ、③文構造、④目的達成度の 4 つの観点で採点しているが、授業内の活動回数に比例して全体的に発話量は増加する傾向にあり、取組の成果がうかがえる。

【GTEC Advanced 結果】

本校の 1・2 年生は GTEC Advanced を全員受験しており、以下は各分野の平均点一覧である。

	H28 入学生	H29 入学生	H30 入学生
Reading	170.8	164.3	169.0
Listening	191.1	188.9	184.6
Writing	123.3	120.9	122.2
Speaking	96.8	105.7	121.6

取組を始めた平成 30 年度入学生は、英語 4 技能のうち Reading, Listening, Writing に関しては、過去の学年と同等またはやや劣るが、Speaking の分野で突出した好成績を収めている。

【今後の展望】

生徒の実績については、今後とも解答音声ファイルや外部試験等の結果を分析し、考察深める必要がある。また、令和 2 年度はコアスクール指定の最終年度になることから、これまで開発した教材、評価法、成果の分析結果等をまとめ、広く情報発信する予定である。

3 新たな教育課程の編成

WWL コンソーシアム構築支援事業への申請の有無に関わらず、5年間のSGHの成果を継続・発展させるべく、新学習指導要領への円滑な移行を視野に入れ、教育課程の編成に取り組んだ。

(1) 「総合的な学習の時間」を活用した課題探究活動とシラバスづくり

SGH研究指定期間中は教育課程の特例を活用し、教科「情報」を学校設定科目「GWI (Global Water Issues)」に置き換え、課題探究活動に取り組んできた。そこで、SGH終了にあたり、「総合的な学習の時間」を課題探究の時間とし、新学習指導要領での「総合的な探究の時間」に移行できるようにした。さらに、2点変更を加えた。

1点目は、これまでクラス単位で行っていた課題探究活動を、全学年同一時間帯で行わなければならないことから、課題探究チームの編成を、クラスを超えて、生徒自らの興味関心によりチーム編成をすることとした。

2点目は、「安全な水の確保」から「持続可能な開発目標 (SDGs)」に変え、17個のゴールのうち、1番「貧困をなくそう」から6番「安全な水とトイレを世界に」までをターゲットとした。

この変更により、シラバスの見直し、外部人材の新たな発掘は予想できた課題であったが、最大の課題は、SGHでは探究活動チームはクラスの生徒で編成されており、担任や副担任が絶えず進捗状況を確認できたが、クラスを超えた編成となっているため難しさが確認できた。言い方を変えれば、生徒の主体性を如何に伸ばすかという点が課題として浮彫になったと言える。

(2) 「教育活動支援業」モデル校事業による再任用教諭（短時間勤務）の配置

ア 趣旨

平成28年度から2年間実施した「学校運営支援員」モデル校事業の成果を受け、平成30年度から「教育活動支援のための再任用ハーフ教員の配置」を平成31年度も継続し、学校における業務改善の取組を進めることを主として、学校が抱える課題にも対応する事業である。

イ 配置と実践

『総合的な学習の時間』を活用した課題探究活動とシラバスづくり」というテーマで申請し、3月上旬には短時間の再任用教諭として英語教員の配置が決定していた。

3月末の採択内定後「WWL推進室」を校務分掌上に位置付け、WWL推進室の英語教員の授業担当時間数を軽減し、『総合的な学習の時間』を活用した課題探究活動とシラバスづくり」を業務に加えた。

短時間再任用教諭の担当する授業時間数を12時間とし、WWL推進室所属の英語科教員2名の担当授業時間数を約6時間ずつ軽減した時間割を編成した。

ウ シラバスづくりにおける授業軽減の効果

シラバスの作成はもちろん、前日までに各時間のゴールが示された指導案について、朝

の打ち合わせを活用し、周知・徹底を図っており、生徒に対しては、Classi を活用し、提示している。また、課題探究活動の深化に重要な役割を果たす、各分野の専門家への連絡について、本時の狙いや目標を提示しながら、より大きな効果が得られるよう連絡・調整を行っており、派遣文書の作成も担当している。

(3) 英語ネイティブ教員の配置

静岡県教育委員会は、英語科・国際科等の設置する県立高等学校において、高い英語運用能力を有し幅広く国際社会で活躍できる人材を育成することを目的としてネイティブ英語教員の採用選考試験を実施した。その結果、2名を合格とし、平成31年度人事異動により、うち1名が講師として三島北高校に配置された。

静岡県教育委員会は、職務内容として、高等学校教員として、授業に加え、部活動顧問や分掌業務、学級担任など、教員としての業務全般を担当するとしている。

本校では、学年は1年部、分掌はWWL推進室、部活動は国際交流部に配属した。

授業では、「コミュニケーション英語Ⅰ」「英語表現Ⅰ」を主に担当し、静岡県教育委員会研究指定「英語コアスクール」事業における、本校のテーマ「英語でやりとりする力」の育成に向け、生徒への指導だけでなく、教員に対しても評価基準を提案するなど本校の英語教育を牽引している。

また、上記1の「総合的な学習の時間」を活用した課題探究活動では、特に英語によるポスターやプレゼンテーション資料作成時の指導に関わり、日本人英語教員の負担感を軽減している。

WWL推進室の業務については、STEM推進コース視察における現地との交渉、プレゼン資料の作成を行い、高校生国際会議のテーマの修正案の提案、分科会の構想立案など重要な役割を担っている。

(4) 令和2・3年度入学生の教育課程編成

ア 文理選択を3年次で行う教育課程

これまで本校では、文系・理系の選択を2年次で行ってきた。1年生には入学間もない6月に次年度の教育課程説明会を行い、夏休みに考え、10月予備登録、11月本登録のスケジュールで指導してきた。そのため、自らの適性をじっくり見極めることなく文理選択を行い、結果としてミスマッチを起こす生徒を一定数いる状況であった。

SGH研究指定期間中は教育課程の特例で、教科「情報」を学校設定科目に替えて教育課程を編成していた。教育課程を見直すにあたり、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、次のことを視野に入れて検討することとした。

① 平成34年度（令和4年度）入学生の教育課程への円滑な移行

② 「何ができるようになるか」の3観点

特に、②については、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」「科学的に思考・吟味し活用する力」「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力」を意識した。

具体的には、「総合的な学習の時間」を探究活動の時間とし、1・2年次では国語、数学、英語に軸足を置きつつ、探究活動を深める理科、地歴・公民、家庭、保健体育がバランス良

く学ぶ。

また、生徒個々の進路実現も踏まえ、3年次で文理選択を行い、理科・地歴を多く学ぶ教育課程を編成し、令和2・3年度入学生の教育課程とした。

イ 学校設定教科「WWL」と学校設定科目の開設

学習指導要領に示される教科・科目以外に、SGHの成果と課題等を踏まえ学校設定科目を開設することとした。

以下のa、bの学校設定科目は放課後、週休日、長期休暇等を活用した活動を評価し、単位認定していく。上級生が下級生を指導し、下級生の意見を研究に反映させ、複数年にわたり課題解決に取り組むことができるよう、課題探究チームが異学年で編成できるようにした。

a 海外研修

平成27年度からベトナムで海外研修を行ってきた。

県内ベトナム人留学生による講義を通して、ベトナムの歴史・文化やSDGsに関わる課題について理解を深めるとともに、課題を設定する。課題に対する解決方法を事前研修によりまとめ、8月下旬に行われるベトナム研修に参加する。

ベトナム研修後、施設訪問・見学、大学等での講義等により課題解決策の見直し、深化を図りながら、英語によるプレゼンやポスターセッションを行う。この成果を発表するため、「SGH・WWL探究甲子園」等の大会に参加する。

事前研修、現地研修、事後研修に対する意欲と成果、プレゼンテーションやポスターセッションにおける表現力等を評価し、単位認定していく。

b STEM for SDGs

静岡大学教育学部熊野善介教授主催の「静岡STEMアカデミー三島」が、本校で、平成30年度から小中学生を対象に、月1回程度の割合で行われており、本校理科教員数名が支援員として参加している。

高校生国際会議テーマ「Multi-Dimensional Approach to SDGs」について、STEMの切り口からSDGsを捉え解決策を見出す科目とする。この成果を持ってアメリカミネソタ州立大学を訪問し、Gillian教授や大学生からの助言を通して、課題研究の修正・深化を図り、現地高校生と課題研究に関するプレゼンテーションを行い、共有する。また、「高校生が競うEnergy Pitch!」等の大会に参加する。

事前研修、現地研修に対する意欲と成果、プレゼンテーションやポスターセッションにおける表現力等を評価し、単位認定していく。

令和2年度入学生から開設される科目であるが、平成31年(令和元年)度入学生から希望者を募り、構想づくりを開始した。

上記a・bとも、主体的な学びの伸長に資するよう、生徒が相互に学び合い評価し合う機会を手厚くする。また、SDGsを通じて社会問題や国際問題を捉え、相手国を尊重し、問題解決に向けた対等なパートナーシップを築く態度を育成できるよう、指導に留意する。

4 高校生国際会議進捗状況

ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアム第2回運営組織委員会において、事業拠点校からたたき台として提案した案について示したが、第3回運営指導委員会では案に基づき組織、テーマ等について検討していくことを確認した。

(1) 実施主体等

主催を管理機関である静岡県教育委員会とし、開催市等を含めた「2021 ふじのくに高校生国際会議実行委員会と下部組織(運営主体)として「2021 ふじのくに高校生国際会議運営委員会」を組織する。

WWL事業の理念や構想を踏まえ、さらに海外にも本県をアピールする機会と捉えて会議を企画する。そのために、会場となる地元自治体及び企業にも協力をお願いし、官民一体となった“おもてなし事業”とする。

また、生徒が主体的に運営できるよう、運営委員会に生徒実行委員会を組織する。

(2) 会議等の概要

ア 期 日 令和3(2021)年8月3日(火)～6日(金)

イ 会 場 三島市民文化会館 ゆうゆうホール 及び 三島北高等学校

ウ テーマ Crisisに負けない持続可能な社会づくりを目指して
～SDGsの視点からの多面的なアプローチ～

懸念 エリア	Deprivation 損失	Scarcity 不足	Deterioration 阻害	Mismanagement 不適切な管理	De-prioritising 優先順位の逆転
関連 SDGs	[1] 貧困 [2] 飢餓 等	[6] 水 [7] エネルギー 等	[13] 気候変動 [14] 海の豊かさ [15] 陸の豊かさ 等	[8] 経済成長 [9] 産業・技術 革新 等	[5] ジェンダー [10] 平等 [16] 平和と公正

(アプローチ)



Crisisの前後や最中に起こることが懸念されることを5つのエリアとし、そのエリアに主に関連するSDGsを上図のように考え、参加する各校には異なるエリアと異なるアプローチをセットで示し、研究を進めることを指示する。

エ 参加予定者

地域	参加単位	国名・学校名など
海外 24名	3名×8校	シンガポール (Jurong West) ベトナム (Vinschool) アメリカ・ミネソタ州 (Owatonna) (St. Paul) 台湾 (馬公) (第一女子高級中学) オーストラリア (Heathfield) (Mitcham Girls)
国内 30名	4名×連携校5校 拠点校10名	県外連携校 (仙台二華、長崎東) 県内連携校 (静岡、静岡市立、沼津東) 三島北

これ以外に、英語ポスターセッション参加者は他の WWL 拠点校及び連携校を対象に募集 (20 校)

オ 日程・プログラム内容概要

月日	内容	場所	公開・参加対象		
			コア	拠点校・連携校	一般
1日目 8月3日	・ 歓迎パフォーマンス、開会式、基調講演 ・ レセプションパーティー (国内参加者のパフォーマンス)	ゆうゆう プラザ	○ ○	○ ×	○ ×
2日目 8月4日	・ コア参加者による英語プレゼンおよびコア参加者以外の拠点校の優秀チームによるプレゼン ・ 5つのフォーカスごとに専門家による講義 ・ コア参加者：所属する分科会ごとにディスカッション ・ フェアウェルパーティー (国外参加者のパフォーマンス)	三島北 三島北 三島北 プラザ	○ ○ ○ ○	○ × × ×	○ × × ×
3日目 8月5日	・ コア参加者：分科会ディスカッション、提案ムービー作成 ・ 募集参加者：英語ポスタープレゼン ・ 提案ムービー上映、講評、閉会式 ・ 写真撮影 ・ (オプション) 三島市内ウォーキングスタディーツアー (英語)	三島北 ゆうゆう ゆうゆう 市内	○ × ○ ○ (○)	× ○ ○ ×	× ○ ○ ×
4日目 8月6日	・ (オプション) 県内バススタディーツアー (英語) バス2台+ガイド 案：富士山周辺、ジオパーク、静岡大学、防災センター など	県内	(○)	×	×

なお、「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」をモデルに、高校生国際会議プレ大会を実施する。また、プレ大会の準備にあたっては、「仮想 静岡 WWL 高校 FALCon」を活用し、その成果と課題を踏まえ、高校生国際会議生徒実行委員会へ積極的に活用する。

第3章 事業拠点校・事業連携校との取組

1 事業連携校への課題探究シラバスの提供

(1) 事業拠点校におけるシラバス作成と実践

ア 課題発見の準備とチームビルディング

WWL推進室による1年部正副担任を対象としたSDGs研修会を実施した。また、初期指導では、SDGs（Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標）についての国連広報センターの動画を見て、これから取り組むべき課題のイメージを共有した。

グループワークでは、SGHの学校設定科目でも活用してきた「プロジェクトWet」のアクティビティー『重大な過ち』を体験し、課題解決の流れに則った研究をするために必要なスキルについて話し合った。

イ 課題設定とフィールドワーク

関心のあるSDGsをテーマとし、クラス横断型のゼミ形式で課題探究を進めている。共通のSDGsテーマで集まった他のクラスの仲間とともにチームビルディングを行い、課題を掘り下げていった。

夏休みにフィールドワークを計画するため、調査で得られた情報の整理方法も重要となることから、静岡県経営管理部ICT推進局統計利用課の天野佑紀氏による「統計出前講座」を実施した。

ウ グループ発表

中間ゴールとしての「紙芝居プレゼン」を含め2回の専門家からの助言をもとに研究を深化させ、2月8日（土）に開催される「静岡県高校生グローバル課題ポスターセッション大会」への出場権を賭けた、2月3日（月）「日本語ポスターセッションSDGsゴール別予選会」を設定している。

エ 個人レポート

「日本語ポスターセッションSDGsゴール別予選会」後、副担任が小論文・レポートの書き方を指導し、下書きデザインを作成する。この下書きデザインに基づき、各自個人レポートを作成していく。作成後、チームで内容をすり合わせ、確認後提出する。

(2) 事業連携校等の教員を対象とした授業公開

県高等学校長協会教育課程専門委員会所属の校長、連携校以外の普通科高校の探究担当教諭も参加した。

月 日	授業目標	内 容
5月13日	問題解決の流れについて必要なスキルと、その問題に影響を受ける人を明確にする手法を理解する。	学年一斉授業による。 ・ウォームアップ ・課題解決に必要なスキル ・「問題解決の流れ」確認 ・その問題に影響を受ける人を掘り下げる
10月23日	今までの研究をもとに、「問題解決の流れ」を意識した紙芝居プレゼンをチームワークよく行う。	専門家来校し、ゴールごとの単位による授業。 ・各チームの紙芝居プレゼン ・聞いているチームは評価表記入
2月5日	代表に選出されたチームのセッションの完成度を高める。	代表に選出されたチームに対し、効果的な質問をする練習をする。



2 県外事業連携校とのビデオレター交流

ライブで交流するにはオンライン環境を整え、タイミングを合わせて生徒が一堂に会せるようにスケジュールを組む必要がある。また、県ごとにネットセキュリティポリシーのレベルが異なるため、他県の連携校と一律なオンラインでの交流を行うことは非常に難しいことが分かった。代わりにビデオレター方式で事前に録画した動画を YouTube に限定公開でアップする方法を提案し、交流することとなった。本校のベトナム研修参加生徒によるビデオレターは7月10日に撮影した。仙台二華と長崎東のビデオレターを本校生徒は7月25日に視聴し、Classi に記録した生徒の感想や質問事項を連携校にまとめて送付した。また、本校生徒のビデオレターを視聴した仙台二華と長崎東の生徒による感想も届いた。



（本校生徒の感想より）

- ・仙台二華高校のみなさんのビデオレターでは自分たちができることをやろうとしているということが印象的でした。だから私たちも自分たちが実際に出来ることに目を向けていきたいと思いました。
- ・長崎東高校のみなさんのビデオレターを見て、自分たちの環境と比較することが大切だと思ったので、参考にしたいと思いました。

3 県内拠点校・連携校間の「FALCon」プラットフォームの開発

(1) S G Hの取組みから

ア 三島北高校では、S G Hにおける課題探究活動を円滑に行っていくことを目的として、平成27年度からClassiを導入した。

「校内グループ」は、全校生徒、学年、ホームルーム、部活動などのグループに加え、課題研究ごとのグループも作成することができる。また、単なる一方通行の情報伝達だけでなく、グループ構成員からの考えの投稿、資料提供もできる機能を有している。



【ベトナム研修参加者への助言】

そこで、「校内グループ」を活用し、課題探究に関する先生方からの助言や生徒間の意見交換、ポスター原稿の提出等を行い、コミュニケーションツールとして活用している。

イ 学校を超えた課題探究活動 ～秋田県立能代高等学校との取組～

課題探究活動に取り組んでいる秋田県立能代高等学校と合同発表会を行った。

平成31年3月15日午後1時30分を会議実施日時と決め、2月27日に遠隔会議システムを用いて教員間の会議を行った。

また、生徒たちは、チーム紹介動画と発表資料をClassi上にアップし、お互いの資料を読み込んで、事前学習を行った。合同会議時には、能代高校2チームが、発表10分、



【チーム紹介動画と課題研究資料のアップ】



質疑応答3分をそれぞれ行い、三島北高校4チームがそれぞれ発表5分、質疑応答3分を行った。

発表・質疑応答後、情報交換会の準備としてワークシートを用いて、「発表の振り返り」「探究学習で学んだこと」「相手高校に聞いてみたいこと」などをまとめた。

【振り返りより(抜粋)】

- ・能代高校のローカルのことと私たちのグローバルなこととつなげて研究したらさらによいものができると思う。
- ・新しいアクションを起こして現状をより良い方向に変えようとしていることと第三者が興味を持ってくれるような内容であったことは共通している。
- ・日本の問題をテーマとした内容でした。高齢化社会の進行は深刻で、農業や医療は私たちの生活にとっても関わっているの、大事なテーマだと思いました。
- ・三島北高の全ての発表の総元になるのは「誰かのために」であり、私たちの内容と似ているところがあると感じた。

【学びを通して伸ばしたい力(上位を抜粋)】

- ・表現・発信力
- ・深い教養
- ・課題解決力
- ・行動力

(2) S G HからWWL コンソーシアムへ

秋田県立能代高等学校との Classi を用いた共通プラットフォーム上での課題研究発表・意見交換の成果を踏まえ、WWL コンソーシアム構築支援事業における事業拠点校・事業連携校間で行う準備に取り組んでいる。

取り組みとして、

① Classi 上プラットフォームに「静岡 WWL 高校 FALCon」という仮想高校を開設する。

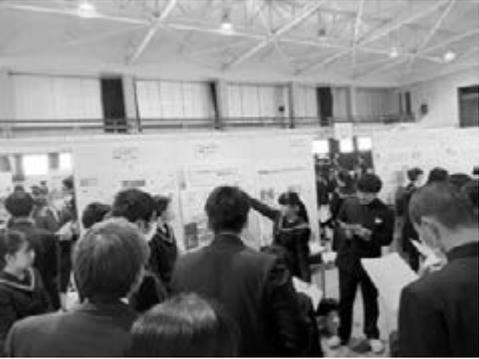
② 1月中旬までに、「FALCon ディスカッションフォーラム」に参加する生徒にログイン用の生徒IDを配布し、各自ログインする。

③ 「FALCon ディスカッションフォーラム」(令和2年2月8日開催)までに参加する生徒は自己紹介動画をアップし、共有する。

④ 「Make Friends セッション」で活用する。また、SDGs のテーマごと割り振られたメンバーで、「アクション宣言ムービー」を作成し、発表する。

課題として、リアルタイムでの合同会議の実施にはICT整備が不可欠である。静岡県教育委員会は Zoom による遠隔授業・会議実施に向けた整備を進めており、今後、県内の事業拠点校・連携校のネットワークはプラットフォームに加え、Zoom を活用した実践も研究していく必要がある。



	<ul style="list-style-type: none"> ・仙台二華校長賞 沼津工業高校 N. MANJIRO 「AI/IoT 技術を用いた地産地消型アクアポニックスの普及とコミュニティ経済の創出」 ・静岡校長賞 駿河総合高校 M-SIPP 「フェアトレードとエシカル消費」 ・静岡市立校長賞 藤枝北高校 食品サイエンス班 「過疎地域の活性化プロジェクト～発酵民宿への挑戦～」 ・沼津東校長賞 仙台二華高校 エコ容器班 「グローバルスタディ課題研究ⅡA」 ・オーディエンス賞 駿河総合高校 M-SIPP 「フェアトレードとエシカル消費」 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p>[講演会] アクアスフィア 橋本淳司氏 演題「未来を変えるプロジェクトの作り方」</p>
公開	保護者、全国のWWL 拠点校および連携校の関係教員、県内の高校の生徒および関係教員、近隣地区の中学校の生徒および関係教員、他

(Google Form による参加生徒の感想)

- ・発表を聞いてくださる人にどのようにしたら伝えたいことをわかりやすく伝えられるかを毎回考えながら発表することができました。1 回目の反省点を踏まえて 2 回目はもっとこうした方がいいという具体的な工夫をチームで話し合っ、より良い発表をすることができました。また、質問でもいろいろな質問をしていただいたり、意見として新しい考えを言ってくださったり、この発表でも新しいことをまた考えることができました。
- ・北高 2 年生のブリッジというチームは、オーディエンスに楽しんでもらえるように、ただ原稿を読むだけではなく問いかけるような形で発表していた。2 年生になったら、自分も「セッション」という場を最大限に活かしたい。

(2) 事業拠点校・事業連携校 FALCon ディスカッションフォーラム (Make Friends セッション)

県内・県外の連携校生徒と本校生徒が SDGs の様々な課題について話し合い、グローバルな課題を解決するためのアクションを協働作業により提案する「FALCon ディスカッションフォーラム」を企画し実施した。また、FALCon ディスカッションフォーラムに先立ち、前日は「Make Friends セッション」を開催し、ディスカッションフォーラム参加者同士の心理的レディネスを構築した。

日 時	令和2年2月8日（土）16:30～16:30 Make Friends セッション 令和2年2月9日（日）9:00～12:30 FALCon ディスカッションフォーラム
参加者	拠点校 8 名、連携校 17 名、計 25 名 （Make Friends セッションのファシリテーターとして拠点校生徒 5 名）
内 容	<p>[Make Friends セッション]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5つのグループに分かれ、三島北高校生徒のファシリテーターによる、「キャット&チョコレート」「SDGs アクションカードゲーム」を用いたグループワーク ・ 三島北高校のネイティブ教員による FALCon ディスカッションフォーラムの目的の共有のためのアクティビティ <p>[FALCon ディスカッションフォーラム]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5つのグループに与えられたグローバル課題のテーマ「女の子の職業選択」「男性の育休」「働き甲斐のある仕事」「社会保障」「プラスチックフリー」について、高校生がローカルなレベルで解決するためのアクション、期待されるその効果、実行までの手順や克服しなければならない課題等を話し合う。 ・ 話し合った内容をまとめ、他校の参加を促すことを目的とする2分間の動画（言語は問わない）を作成する。 ・ 完成ムービーの視聴および講評（アクアスフィア 橋本淳司氏） <div data-bbox="826 421 1439 761" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="842 878 1439 1209" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="341 1442 721 1729" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="730 1442 1426 1729" data-label="Image"> </div>

(Classi FALCon グループへの Web アンケートより 生徒の感想)

- ・ SDGs を楽しくわかりやすく考えるという視点に気付かされた。また、バックキャストिंगの考えもとても私にとって新鮮で、今日の目の前の課題にどうしても目が言ってしまうがちだが、未来を考えると、理想を追うことの大切さを学んだ。

・身近にあるさまざまな問題について、仲間と協力しながら解決策を思案していき、解決に導く力、また、他の人の意見も大切にしながら自分の意見もしっかりと持ち、それぞれの良いところを組み合わせることで最善の結論を出す力を身に付けられたと思う。

(3) 拠点校・県内連携校による全国高校生フォーラム視察

全国高校生フォーラムは、英語でのポスター発表により日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案等を発信する場であると同時に、ふだん直接交流することがない全国の高校生とアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生が、グローバルな社会課題をテーマとして交流し、新たな気付きを得たり、ネットワークを作ったりするきっかけの場である。

(文部科学省ホームページ「2019年度全国高校生フォーラム開催のお知らせ」より 閲覧令和元年12月31日)

全国のトップレベルの課題研究の成果に触れる機会を提供して探究活動のゴールの姿を共有することを目的とし、静岡発と三島発の貸し切りバス2台で会場に向かい、全国110校によるポスターセッションに以下のように参加した。

参加形態	拠点校三島北	連携校静岡	連携校静岡市立	連携校沼津東
発表	○	○	○	—
生徒見学	○	○	○	○
教員見学	○	○	○	○



(一般参加者として見学した本校1年生の感想)

このフォーラムに参加して学んだことは2つあります。1つ目は我々高校生にもできることは沢山あるということです。私たちは研究をしている最中に自分たちで「これはできる」とか「これはできない」とか決めつけていました。しかし今となってはもう少し考えるべきだったと思います。たとえ自分たちでは不可能でも誰かの助けを借りれば何かを起こせるからです。2つ目は英語に対しての向上心を更に持つことができたことです。なぜならフォーラムには英語が上手な高校生がたくさんいたからです。同じ高校生として負けてられないと向上心を持つことができました。

5 探究活動の発表実績等

日 時	コンクール・大会と研究要旨	表彰等
11月7日	<p>WWL 事業幹事管理機関筑波大学坂戸高校主催： 高校生国際 ESD シンポジウム・The 1st SDGs Global Engagement Conference@Tokyo 英語ポスターセッション参加 <u>チームムックルン</u> 「ヒトとトリがスメル町」</p>  <p>(研究要旨) 春と秋、三島駅南口駅前の櫛にムクドリの群れが飛来し、糞の悪臭と不衛生さが駅の利用者を困らせている。しかしムクドリにも、人間のそばで生活する理由がある。一羽では、天敵である猛禽類に襲われる危険があるため、集団で行動しかつ人通りの多い駅前で生活しているのだ。本研究では人間とムクドリの両者が共存できる街を作るため実験を元にオリジナルの消臭剤を作り人々の不快感を解消したいと考えている。</p>	
11月24日	<p>電気新聞主催： エネルギー教育賞特別企画『高校生が競う Energy Pitch!』 日本語プレゼンテーション <u>チーム白い砂浜</u> 「プラスチックとエネルギーの循環を目指して」</p>  <p>(研究要旨) 海洋プラスチック問題。それは G20 でも話し合われたほど深刻な問題となっている。そこで私たちは海洋プラスチックをエネルギーに変換することを目的として研究した。おそらく多くの人々がプラスチックをごみとイメージするだろう。私達の解決策により一般の人が考えるプラスチックの概念を覆す。</p>	<p>技能賞 (2位)</p>
11月30日	<p>Green Blue Education Forum 実行委員会主催： Green Blue Education Forum コンクール U-18 の部</p>	<p>優秀賞 (2位)</p>

	<p>日本語プレゼンテーション <u>チーム Ametrine</u> 「バナナレボリューション」 (研究要旨) 三島市には「疏水百選」や「平成の名水百選」に指定された柿田川がある。一方で、世界には現在でも汚染された川が数多く存在する。本研究は、柿田川のような美しい川を作るため自然由来の物質を利用した浄水方法を提案するというものである。それらの中でもバナナの皮に着目し、実際に実験を行って浄水効果が期待できることを確かめた。また、自然由来という考え方は国連でも取り入れられ、NBS といい今日注目されている。</p>	
<p>12月22日</p>	<p>文部科学省、国立大学法人筑波大学主催： 全国高校生フォーラム 英語ポスターセッション <u>堀江拓道</u> 「Collect it, decorate with it」</p>  <p>(研究要旨) 海洋プラスチックごみ問題は注目を浴びているが、根本的な解決までには至っていない。そこで、私が自作した「きぼう」という装置を使ってマイクロプラスチックを回収し、それを使った砂絵のような新しいアートワークを展開した。この斬新なアートワークで、多くの人々が、楽しく海洋プラスチックに触れることができ、海洋プラスチックが新たな「画材」として生まれ変わることを目標としている。</p>	<p>生徒投票賞</p>
	<p>内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局主催： SDGs まちづくりアイデアコンテスト <u>チーム ブリッジ</u></p>	<p>ファイナリスト 25点に選出</p>
<p>2月8日</p>	<p>常葉大学主催： 高校生ビジネスプランコンテスト日本語プレゼンテーション 調査・研究の部 <u>チーム Mix</u> 「Education First」</p>	<p>グランプリ受賞</p>

<p>2月9日</p>	<p>全国高校生マイプロジェクト実行委員会： 全国高校生マイプロジェクトアワード2019 <u>チームブリッジ</u> (研究要旨) SDGs ナンバー8の『働きがいも経済成長も』という観点から研究を進める中で、私たちは、ブラックだとされる教員の働き方改革が必要だと考えた。そこで、校長先生、他校の管理職の先生に行った教員の現状に関するインタビュー調査を踏まえて私たちは『業務内容の改善、簡略化』が必要であると考え、負担になりやすい業務と思われる土曜講座の内容改善と施錠業務の簡略化のプランを計画、実行した。</p> <p><u>チームとらっしゅばず〜か</u> こんにち着目されている女性の社会進出。しかし、ワーキングマザーにとって、仕事に家事育児をすべて完璧にこなすことは容易ではない。本研究は、職場に迷惑をかけられないから、と産休や育休にネガティブな印象を持っている女性や労働環境に向けて知り、行動に起こしてもらいたい制度があるということを独自の解決方法として、誰もがルールを知っていることからオリジナルのかるたを用いて提案するものである。</p>	<p>関東サミット進出</p>
<p>3月21日</p>	<p>関西学院大学、大阪大学、大阪教育大学主催： WWL・SGH× 探究甲子園 ・日本語プレゼン部門 <u>チームブリッジ</u> (研究要旨) 11.3%、これは三島市で「孤独」を感じつつ、一人で食事を取っている子どもの割合だ。私達はこの孤食の経験を0にする為に子ども食堂に焦点を当てて活動してきた。私達の調査した「おたまちゃん食堂」では、若年層の交流・地域の食材の使用量が少ないなど、様々な課題が見えてきた。「おなかやすいた」「寂しい」という感情は数値で表せない。孤食や貧困の現状を変えるため、持続可能な子ども食堂を作る。食卓に夢を！ ・ラウンドテーブル型ディスカッション部門「男性の育休」 <u>萩原さら</u></p>	<p>本選出場</p>

6 事業連携校カリキュラム開発進捗状況

(1) 静岡県立沼津東高等学校

ア 課題探究に関するシラバス

本校の総合的な探究の時間（「揺籃」）では、「自己と世界を知り、将来の生き方を考える。」ことを目標に、自らの将来の進路について、1年次は「知り」、2年次は「深め」、3年次は「実現する」ことを各学年次のテーマとして、三年間を通して自己の在り方生き方を考えることができるようにすることを目指している。実施の核として、一年次の「職業を知るセミナー」（※1）、二年次の「大学出張講義」（※2）では、社会人や大学教授等を講師に招き、高校生が将来像を鮮明にすることに資する機会としている。また、一年次で行うディベート、二年次で行う模擬国連により、生徒グループ内での協働的な学びをとおして、社会における課題を知り、情報を集め、整理し、表現するなどの能力を伸長することを目指し、生徒の実践からはそれらの能力の発揮が見られている。

このような能力が、総合的な探究の時間の多くの場面で培われているものと評価しているが、一方で、意義深い学びを今後とも充実させるためには、例えば、現状から問いを見出し、解決すべき課題として設定し、これらの課題解決に向けて主体的かつ協働的に取り組むための指導の在り方などについて、研究を一層重ねる必要がある。このことに向け、今年度は他校訪問などにより指導事例の収集に努めてきた。

以上の経緯から、本項目「課題探究に関するシラバス」への本校の取組として、「総合的な探究の時間の指導シラバスの研究」を軸に据えた。加えて、総合的な探究の時間及びその他の教育課程上の教育活動以外にも、本校生徒の学校内外での意欲的な活動（※3）の場面が多く見られることから、このような意欲の大切さを引き続き奨励する適切な情報提供の在り方などは、この指導シラバスに盛り込むべき大切な視点であるととらえている。

（※1）業種の異なる社会人を招聘し、生徒は希望に応じて2コマの講義を聴講する。

（※2）専門分野の異なる大学教授等を招聘し、生徒は希望に応じて2コマの講義を聴講する。

（※3）一例として、学校保健委員会における生徒会活動（保健委員会）による研究発表、科学系部活動が中心となつての研究応募、「科学の甲子園」全国大会出場（3年連続）、個人の取組としての科学オリンピック等のコンテストへの参加など。また、「全国高校生フォーラムポスターセッション」（令和元年12月）への一般参加について情報提供したところ、生徒からは8人の参加希望があった。

イ 教育課程上の位置付け

総合的な探究の時間は、各学年次 1 単位の計 3 単位。

ウ 次年度の取組

探究的な学びの充実に向けた、総合的な探究の時間の指導シラバスの研究を継続する。その際、現状の指導の状況を的確にとらえ、今後の指針を適切に定めることにより、すべての教員が担当する総合的な探究の時間のシラバスとして有効に機能することとなるよう留意する。なお、研究の主眼として、例えば、生徒による課題設定に至るまでの指導過程、課題解決に向けた協働的な取組を充実させる指導、評価手法の研究、指導上の要点の教員間での効果的共有の在り方などが考えられる。

あわせて、学校内外で生徒が自発的に参加する学びの機会への意欲的参加を促す情報提供の在り方、また、総合的な探究の時間に修得する知識・技能と他教科等の指導における知識・技能との関連性などについても留意する。

(2) 静岡県立静岡高等学校

ア 「総合的な探究の時間」の教育課程上の位置づけ

- a 平成 30 年度入学生までは、「総合的学習の時間」（本校では「印高学習」という。）として、3 単位（各学年 1 単位）で実施してきた。校訓「印高（高きを仰ぐ）」のもと、横断的、総合的に自己を理解する活動、進路を設計する活動、文化を創造する活動を行う中で、物事に主体的、創造的、協働的に取り組む態度や能力を育てることを目標としてきた。学習対象を「働くことの意義と自己認識」「社会問題と芸術性」「大学と職業」の 3 本の柱とし、具体的には教育講演会・進路講演会・大学訪問等の進路学習と保育体験、芸術鑑賞会などの特別活動、学校祭の仮装発表など学校行事を「印高学習」に充ててきた。
- b 学習指導要領の改訂に伴い、平成 31 年（令和元年）度入学生から学年進行で「総合的な探究の時間」（本校では「印高探究」という。）を 3 単位（各学年 1 単位）で実施することとし、これまでの「印高学習」に探究のプロセスを加えることを、校内検討委員会で検討した。委員会では、「印高探究」の目標を、校訓「印高」の精神のもと、探究の味方・考え方を働かせ、地域や社会の「ひと・もの・こと」に関わる探究を通して自己の在り方、生き方を考えながら、課題の発見と解決ができることとし、育てたい資質・能力と令和元年度入学生の 1 年次の内容を決定した。

イ 印高探究のシラバス

- a 令和元年度入学生の印高探究の1年次の取組の概要は以下のとおり。印高探究では、探究課題を「生徒の興味関心に基づいた社会問題解決に対する取組」と「自己の将来や夢に基づいた現代社会の諸問題について考える取組」の2本の柱とし、前年度まで実施してきた「印高学習」の要素も取り入れながら、1年次前半には「ビブリオバトル」を、後半には2年次の課題研究への橋渡しとしての「プレ課題研究」を実施した。ビブリオバトルでは、本の選択、原稿作成、発表、相互評価等の探究のスキルの育成をねらいとし、プレ課題研究では「世界を変えるアイデアを考えよう」というテーマで、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現という探究プロセスを深めて実践することをねらいとした。ルーブリック等の開発にもつとめ、教員だけでなく生徒の相互評価も取り入れた。
- b 2年次以降の印高探究の活動内容は、「修学旅行」「進路研究」等を計画している。主たる2つの課題は、これまでの印高学習でも実施してきた内容であるが、1年次からの探究活動を生かした形で、課題設定に重きを置き、探究のプロセスを意識した探究活動とすることを計画している。今後の課題としては、①カリキュラム・マネジメントの視点から、3年間を見据えた探究活動を作り上げること②年度毎の振り返りや他校の先進事例等を参考に改善・改良を常に行うこと、などがあげられる。

ウ その他の探究活動

平成30年度から静岡県教育委員会の指定を受け「魅力ある学校づくり推進事業（進学重点コアスクール）」を実施している。テーマを「印高（高きを仰ぐ）の精神の涵養」とし、校内外の体験活動を通して主体性を引き出すことをねらいとしている。大学教授等を招いての講座（医学、法学、国際関係学等）、キャンパスツアー、エンパワーメントプログラムなどを実施し、高い志の育成に努めている。今年度は、静岡市やNPOとも連携し「高校生キャリア形成支援事業」を行った。「静岡の街と未来を考える」「国際協力・国際貢献に挑む」「ソーシャルチェンジ・社会課題に挑む」等、現代社会の課題を探究し、市内高校生による発表会にも参加した。これらの活動は、希望者を対象とした取組あり全校生徒が参加することはできなかったが、授業・学校行事・部活動等で経験できないことを通して、進路意識の高揚や学校生活への主体的な取組を引き出している。

(3) 静岡市立高等学校

ア 課題探究に関するシラバス

拠点校を中心とした研究開発「ふじのくにアドバンスト・ラーニング・コンソーシアムの構築」に資するため、連携校として以下のことに取り組んだ。

a SDGsに関連する地域協働型課題研究の推進

- ・地域協働型課題の中心的な研究「幸せなふるさとのつくりかた」

(SDGs 10『人や国の不平等をなくそう』に関連する研究)

概要：昨年夏に、私たちは高齢化率が40%を超える両河内（静岡市の中山間地域）の方々と出会いました。私たちのミッションは、自分を成長させてくれた両河内を『幸せなふるさと』にすることと、『幸せなふるさとのつくりかた』を、必要としている人の元へ届けることです。この企みは、連合自治会長の中山さんがつぶやいた「空の青さだけでは人は来ないよ。」という言葉が胸に刺さったことがきっかけで始まりました。私たちはこれまでに13回、両河内を訪れました。そして、地元在来種の「ここ豆」をテーマに、ワークショップ開催、豆や土壌成分の分析、お菓子の開発、文化祭での出店、様々な場での発表（7回）をしながら、ファンを増やし続けてきました。現在は、静岡市街地から企業の社長等の情熱的な人を両河内に連れてきて、その方々の「夢とリソース」と私たちが創ろうとしている「ここ豆カフェ」を掛け合わせてイノベーションを起こすことに挑戦しています。（生徒が作成した紹介文より抜粋）

- ・全校を巻き込んだフィールドワークの実施

10/19（土）9:30～14:30

「ここ豆収穫体験・試食交流会」（静岡市清水区中河内）

11/23（土）9:00～14:30

「ここ豆（大豆）収穫」（静岡市清水区中河内）

- ・グローバルな社会課題研究「私たちはまだ幸せを知らない」

(SDGs 4『質の高い教育をみんなに』に関連する研究)

概要：「教育と幸福に相関が無い」というデータが、私たちに幸せとは何かを考えさせた。人はネガティブな生き物だ。日常会話でもネガティブな発言の方が多し。私たちは新明解国語辞典に掲載されている全8万語を一つずつ調べたが、ポジティブな感情語は659語しかなかった。ネガティブなものは1107語もある。負の感情にとらわれがちな私たちが幸せになるには、意識の焦点を自他の強みに向ける必要がある。私たちは、インタビューやワークショップを通じて、参加者が自分の強みを発見し、自他のポジティブな側面を意識できるようになるためのプロジェクトを立ち上げた。インタビューは15人の教員に対して行い、ポジティブな対話を促進するワークショップは、これまでに中学生や社会人を対象として3回にわたって開催した。このプロジェクトを私たちと関わった全ての人が幸せになるため

の一步を踏み出すきっかけにする。それが私たちの使命だ。(生徒が作成した紹介文より抜粋)

b WWLコンソーシアム構築支援事業に関連する研究発表大会への参加

- ・12/22(日)「2019年度全国高校生フォーラムポスターセッション発表」
→2年生3名と教諭1名が参加
- ・2/8(土), 2/9(日)「静岡県高校生グローバル課題研究ポスターセッション大会及び事業拠点校・連携校によるFALConディスカッションフォーラム」
→2年生3名と教諭2名がポスターセッションに参加、他3名と教諭1名がディスカッションフォーラムに参加
- ・3/21(土)「2019年度文部科学省WWLコンソーシアム構築支援事業 WWL・SGH×探究甲子園2020」
→1年生3名と教諭1名が見学

c WWLコンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校の視察

- ・10/23(水)15:10~16:00「課題研究活動の授業公開」(静岡県立三島北高等学校)
→教諭2名が見学

d プラットフォーム「WWL静岡」への参加

静岡県内のWWL拠点校・連携校(三島北、沼津東、静岡、静岡市立)でClassi上にプラットフォームを開設し、研究発表大会に参加するメンバーの交流(学校紹介・メンバー紹介・発表内容の概要説明等)や情報共有を行う。

イ 教育課程上の位置づけ

2年生は「総合的な学習の時間」を「SS探究Ⅱ」とし、1年生は「総合的な探究の時間」に「SS探究Ⅰ」を設定している。これらの科目が本校におけるカリキュラムマネジメントの中核となり、教科や学年の壁を越えた学びの場の設定を可能にしている。

ウ 次年度の取組

- ・WWLの取組要件にある、「グローバルな社会課題研究としてテーマを設定すること」、「外国語や文理両方の複数の教科を融合し、テーマと関連した新たな教科・科目を設定すること」、「海外の連携校などへの短期・長期留学などをカリキュラムの中に体系的に位置づけ、対象となる生徒が必ず経験するようにすること」、「国内外の大学、企業、国際機関などと協働し、国内外の高等学校などとの連携によるテーマと関連した高校生国際会議などを事業終了までに行うこと」について、本校のSSHプログラム研究開発と相互作用を生み出すことができるようにマッチングをする。
- ・WWLの目標に沿った生徒の学習評価のあり方について検討する。

7 国の他事業との校内体制の整備

(1) SSHとの関連や体制整備（静岡市立高等学校）

本校SSHにおいては、以下のことを目的および目標として掲げている。

【目的】主体的に課題の解決に取り組み、国際社会で活躍・貢献できる人材を育成するとともに、静岡市における科学教育の推進に貢献する。

【目標】研究1 科学及び数学における概念、原理・法則などを活用した科学教育プログラムを研究開発し、主体的に課題の解決に取り組む生徒を育成する。

研究2 生徒の視野を広げる科学教育プログラムを研究開発し、国際社会で活躍・貢献できる生徒を育成する。

研究3 地域の理科好き・数学好きな子どもを増やす科学教育プログラムを研究開発し、静岡市立の高校として、静岡市における科学教育の推進に貢献する。

「主体的な課題の解決」と「国際社会で活躍・貢献する人材の育成」を実現するためには、生徒が様々な経験を重ねながら視座を上げていくことが求められる。WWLの連携プログラムを通して連携校同士で交流を深め、世界を見つめる視点を獲得することが、本校SSH事業の推進を支えている。外国語や文理両方の複数の教科を融合した学びや、国内外の高等学校と連携したテーマ設定等、新しい視点から既存のSSH事業を見つめ直すことができた。

第4章 事業拠点校・連携校の特徴的な取組

1 静岡県立三島北高等学校

(1) 海外研修・海外高校との交流

ア 立命館アジア太平洋大学（APU）留学生による交流支援

オンライン会議システム appear.in（現在は Whereby というサービスに移行）を用いて、APUの留学生と英語による交流を行った。この交流は、スーパーグローバル大学（タイプB）創成支援事業の中間評価でA評価を獲得しているAPUの優秀な留学生人材とのオンライン交流により、コストをかけずに本校生徒が生徒の英語に触れ「英語によるやり取り」をする機会を作ることとを目的とし、昨年度より始めたものである。今年は、英語ディベートや英語によるプレゼン発表を控えている部活や生徒の直前のリハーサルという位置づけで支援を依頼し、準備1時間、支援のオンラインセッション1時間に対して謝金を支払った。



月 日	交流までのプロセス
9月半ば	副校長より今年度の交流について依頼
9月27日	APU アドミッションズオフィス職員の来校 進路課長およびWWL推進室長と面談 交流事業の効果と意義について確認 3回の交流日程を提示、交流留学生の募集について合意、募集開始
10月7日	交流の留学生決定、謝金の口座登録手続き開始

	交流日時	留学生出身国・性別	支援内容
第1回	10月16日 6:30～17:30	ベトナム・男	県大会を1か月後に控えた国際交流部のアカデミック型英語ディベートの立論2本に対する検討
第2回	12月6日 15:30～16:30	インドネシア・女	立教大学主催高校生探究学習発表会に出場する4組6名の英語プレゼンテーションへのアドバイス
第3回	12月18日 16:30～17:30	タイ・女	全国高校生フォーラムに出場する1組1名の英語ポスター発表へのアドバイス

イ 異文化理解講座

・目的

3年後にWWL事業において本校生徒の企画・運営による国際会議を実施するにあたり、異文化を理解し、国際的な素養を持ち、積極的に交流を図って自ら成長する生徒の育成を目指す。

・概要

講師として招聘した外部人材が、当該国の現状や課題を紹介したり、SDGsの観点から問題提起をしたりするワークショップ型の講義を行う。各学期に1回程度ずつ、年間3回実施する。

・実績

日時	講師所属、講師名（敬称略）	出身国・調査国	主な内容
令和元年 7月10日	静岡県立大学国際関係学部 4年生 チャン・ティ・トム	ベトナム	ベトナム文化、日越の関係
令和元年 10月24日	公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 ミャンマー事務所 長 市川斉	ミャンマー	ミャンマーの国情、国際ボランティア
令和2年 2月12日	日本経済新聞株式会社グローバル事業局兼東京・編集局 NAR編集部プロデューサー 長尾久嗣	タイ ミャンマー 香港	アジア諸国での取材体験

ウ 第5期、第6期トビタテ！留学 JAPAN

・第5期 留学実績（連続5期）

	生徒1	生徒2
分野	アカデミック（テイクオフ）	国際ボランティア
留学国	カナダ・トロント	カリフォルニア州アーバイン
期間	令和元年7月26日～8月15日	令和元年8月5日～8月20日
報告会等	（8月31日）コミュニティFMボイス・キュー番組「ウォータービジョン」出演 （10月29日）図書委員会生徒および希望生徒に対して実施（せせらぎ講座）	



・第6期 応募状況

分野	人数
アカデミック（テイクオフ）	8
アカデミック（ショート）	3
国際ボランティア	3
合計	14

(2) 留学フェア@三島北高校

英語教育・グローバル人材育成教育の一環として、生徒が高校在学中又は大学進学後の海外留学について考える契機とするため、1・2年生を対象とした留学フェアを実施した。内容として、①外部講師による海外留学全般に関する解説、②外国語教育・海外留学派遣に実績のある大学の事例及び留学生による講話を行い、生徒が短期・長期留学及び海外大学進学等に関して、具体的なイメージを持てるよう工夫した。

日 時 令和元年12月20日(木) 午後1時～4時

参加者 三島北高校1・2年生の希望者18名

内 容

【講演】海外留学・進学について

講師：大和 盟（やまと まもる）氏

近畿日本ツーリスト 首都圏国際交流センター

【講演・交流】東京外国語大学（TUFS）タイム

①東京外国語大学について

講師：国立大学法人東京外国語大学 高大連携支援室

志賀 洋子（しが ようこ）氏

②留学体験談（日本人学生2名、外国人留学生2名）

日本人男子学生（ブラジル連邦共和国 パラナ連邦大学 約一年留学）

日本人女子学生（スペイン マドリード自治大学 10ヵ月留学）

外国人留学生（出身国：イタリア、女性）

外国人留学生（出身国：ウズベキスタン、女性）

③質疑・交流タイム

生徒の感想

- ・大学や大学院に進学した時に留学するのは難しいと思っていたけど、業者の方のお話を聞いて、様々な制度があること、様々な大学の特徴を学ぶことができ、より留学を身近に感じるようになった。
- ・東京外国語大学の方々の発表はすごく刺激的で面白かった。
私は留学といえば英語に関してしか考えたことがなかったので、様々な国へ留学に行った方のお話を聞くことができ、すごく良い経験になりました。まずは英語をもっと勉強したり、成績を上げるよう頑張りたいと思います。
- ・今までは、ただ漠然と海外に行きたい、留学したいと考えているだけだったけど、今回の留学フェアで、留学をすることのメリットや留学に必要な具体的なことが分かり、参考になった。

担当者所感

生徒たちにとって、海外留学経験のある日本人学生や外国人留学生の話は、大変刺激的だったようである。留学する意欲の高揚に加え、日ごろの学習に対する意欲向上につながったのは大きな成果であったと感じる。



【大学生による留学体験談】



【外国人留学生との質疑・交流】

(3) 英語教員研修会

三島北高校における英語教育コアスクール事業の成果を地域の教員と共有し、地域の英語教育指導力の向上に寄与することをねらいとして、英語教員研修会を実施した。研修では、平成30年度から取り組んでいる授業内発話活動の理論的裏付けとなっている「言語機能」に関して、講話や少人数による発話演習を通じて理解を深めた。また、本校における Proficiency Test（発話テスト）に関して、実施手順や評価基準等を共有する時間を設け、本校における取組の理論的裏付けと実践内容を体系的に把握し、各校での英語教育改善の契機となることを目的とした。

日 時 【第1回】令和元年12月26日（木） 午前9時～午後4時

【第2回】令和元年12月27日（金） 午前9時～午後4時 ※第1回・2回とも同内容

参加者 静岡県内公立高校の英語教員各回6名（計12名）、見学者4名

内 容 Creative Speaking 研修（約5時間）

【講師】（株）アルク専属トレーナー 尹 英海 氏

三島北高校における Proficiency Test の手法及び成果の説明

【担当】三島北高校 副校長、2年部英語科

研修満足度（2日間合計12名のアンケート結果より）

大変満足	やや満足	やや不満	大変不満
11	1	0	0

参加者の感想

- Speaking の力を高めるために段階的にどのような点を指導していくべきかが参考になりました。
- 演習で言語機能に関して段階的に練習できたので言語の働きが見えてきました。また、三島北高の実践に関して講義や演習を体験し、自校でもできると思いました。
- Speaking をどのように指導に取り入れようかと悩んでいたのが、良いアイデアをもらいました。
- Main Action → Extra Information → Time Expression の順で発話を組み立てると、言いたいことが明確になる。英語力向上に向け、具体的な道が見えてきました。
- Speaking の指導を熱心に行っていることが羨ましいです。まだ古い考えの同僚が多く、Speaking の指導を取り入れることが難しいです。
- 所属校では英語科の教員同士で意見がまとまることがないので、協力して同じゴールを目指していることが、とても羨ましいです!!



【尹講師による Creative Speaking 演習】



【三島北高校の実践報告】

2 静岡県立沼津東高等学校

(1) 総合的な探究の時間「揺籃」における取組

ア ディベート（1年次生）

学年統一テーマについて、4人グループごとに、調査活動とディベート準備を行った後、各クラスでの予選リーグによるクラス代表決定、学年全体でのクラス対抗戦の順に実施する。各対戦での手順は、立論（肯定側）→質疑（反対側）→立論（反対側）→質疑（肯定側）→第一反駁→第二反駁 の順で実施する。

今年度のテーマ：「日本は死刑制度を廃止すべし」

イ 模擬国連（2年次生）

学年全体を4グループに分け、各グループ内で19か国の代表団を結成して、討議を行う。テーマについての政策の立案に当たっては、自国の事情に基づいて、自国の利益を最優先させたものになるように、証拠に基づいた論理的な議論の構築を図る。合同クラス討議、学年全体討議の順に実施し、4つのグループごとに決議案を採択する。審査委員長（学年主任）は教員団と合議の上、全体のベスト決議賞、ベストスピーチ賞、最優秀大使賞を選考する。まとめとしてレビューを実施して会議を終了する。

今年度のテーマ：「気候変動に向けた国際社会の将来的な取組」

(2) BB (Building Bridges) 事業

本校同窓会主催事業として、平成15年から行っている。新入生に向けて入学時に事業説明を行い、希望した者を対象に、放課後の英会話講座、外部英語検定試験の受験（1学年次末）を経て、海外研修参加候補者を選考する。2年次当初に、小論文、プレゼンテーション、英語面接による最終選考を行い、10名をワシントンD.C.に派遣する。選考に選ばれた者は、派遣前事前学習として、アメリカの歴史・文化の学習の他、訪米時に交流する現地高校との相談に基づき決定したテーマについて学習し、現地高校生との交流時の準備を行う。今年度は、LGBT、気候変動問題を共通テーマとし、銃規制、日本の米軍基地問題を選択性の第2テーマとしてディスカッションを実施した。

希望者は1年次から互いに切磋琢磨しつつ、各自が研修全般に主体的に取り組む姿勢を見せた。また、派遣生徒も、選考に漏れた生徒も、校内行事のあらゆる場面でリーダーとして活躍している。

(3) 各種講演会

生徒の意欲を喚起する趣旨で、外部講師による複数の講演会を年間をとおして行っている。今年度は、「文武両道のすすめ」講演会（5月、1年次生対象）、科学講演会（理数科全員、普通科希望者対象）、医学科講演会（希望者対象）、秋季講演会（全校生徒対象）を実施した。講演後の質疑では、生徒からの質問に多くの時間を要することが多く、主体的な参加が見られている。

(4) 地域に学ぶ

従来から、生徒の学校外での自主的な学びを奨励している。今年度、学校が情報提供を行い生徒が自主的に参加したものとして、日本の次世代リーダー育成塾、静岡大学 FSS (Future Scientists' School)、静岡県グローバル人材育成事業（長期留学）への応募、科学オリッピッ

ク等のコンテスト（化学グランプリ、日本数学オリンピック、日本生物学オリンピック、科学地理オリンピックなど）への参加、科学の甲子園全国大会出場（3年連続）、AOI-PARC（静岡県の先端農業イノベーション拠点施設）の見学研修、地域の病院への見学研修などがある。

3 静岡県立静岡高等学校

(1) 2019年度全国高校生フォーラムへの参加

9月、夏季休業中に短期留学等の国際交流活動やリーダー研修に参加した生徒7名による報告会を実施した。体験・経験内容、今後どう生かすのか等をプレゼンテーション形式で、1人8分（5分発表、3分質疑応答）で発表した。9月下旬、12月に開催される全国高校生フォーラムへの参加者を募ったところ、報告会に参加した生徒を中心に4名の希望者があった。ガナでの国際ボランティアに参加したAさん（2年生）、静岡県モンゴル派遣事業に参加したBさん（2年生）、日本の次世代リーダー養成塾に参加したCさん（2年生）、少年少女国連大使としてスイス（国連・ILO・WHO・UNHCR）及びスウェーデンを訪問したDさん（1年生）の4名であった。ポスター発表のテーマを「日本社会が形作る“ジェンダー格差”に関する一考察」とし、男女格差の観点から、誰一人残されない社会に向けた一つの方向性を提案するものとした。国際交流活動等の経験と高校生の意識調査をもとに、日本と諸外国を比較し、不平等の根底にあるものを探究した。研究、発表に当たっては、本校教員、ALT、静岡市女性会館の職員、静岡県立大学の先生の助言をいただきながら12月22日の発表に向けて、原稿、ポスター、プレゼンテーション等、準備を行った。当日の発表は、9月からの短期間の準備であったが、夏休みに4人が経験した国際交流活動やリーダーシップ研修で培った力が発揮され、参加生徒にとり充実したフォーラムとなった。

(2) 静岡県高校生グローバル課題研究ポスターセッション大会への参加

12月の2019年度全国高校生フォーラムの参加者4名が、WWL コンソーシアム構築支援事業静岡県高校生グローバル課題研究ポスターセッション大会へ参加した。12月のフォーラム発表の振り返りを行い、ポスターやプレゼンテーション技法を改善し大会に参加した。発表は、12月の経験が生きていて、内容が整理され、発表態度にも向上が見られた。また、他校の発表の見学を通し、様々なグローバル課題を学ぶことができ、視野の広がりにつながった。

同時に開催されたFALCon ディスカッションフォーラムにも参加し、事業拠点校及び事業連携校の生徒との交流を通して、自分たちの課題研究の振り返るとともに、同世代の生徒の課題発見力、課題解決力を実感する良い機会となった。

(3) 静岡市内合同エンパワーメントプログラムの実施

2018年度に本校単独で開催したプログラムを、今年度は静岡市内の3校（静岡高校、清水東高校、静岡市立高校）合同で8月19日～23日の5日間の日程で実施した。グローバル時代を生きるために必要な資質・能力の育成をねらいとし、海外大学生又は国内の外国人留学生をグループリーダーとし、グローバルな課題について英語で議論するプログラムであり、3校から95名（静岡52名、静岡市立7名、清水東36名）が参加した。普段の授業と異なる環境でのプログラムで、主体性やグローバルな視点の育成が図られ、さらには他校生徒との交流・共働の場面では、果たす役割を意識したリーダーシップも学ぶ良い機会となった。

(4) 東海公立高等学校即興型英語ディベート交流大会への参加

6月、岐阜高校で開催された交流大会に6名（2年生3名、1年生3名）が参加した。東海4県4校37名の参加があり、参加生徒は英語でのディベートの手法を学ぶだけでなく、社会に対する視野の広がりや、論理的な思考の必要性を感じた交流大会であった。なお、事前学習として5月に本校で即興型ディベート体験会を開催し23名の生徒の参加があった。

4 静岡市立高等学校

(1) 普通科1年「SS探究Ⅰ」（総合的な探究の時間に実施）

ア 目的

身の回りの現象から自ら課題を見出し、データサイエンスを活用して分析・検討する能力を育む。

イ 内容・実施方法

a データサイエンス入門

データを扱う「科学の文法」として統計に関する基礎知識を身に付け、統計思考力を高める。また、身の回りの現象を分析する演習を行う。官公庁の専門家を招いてデータサイエンスの実際を学ぶ。

b フィールドワーク

静岡市内の施設や企業等を訪問して対話や体験を重ね、科学技術および地域、行政、企業の視点から「静岡市の今とこれから」について学ぶ。

c 静岡市未来探究

静岡市における、科学技術および地域、行政、企業が抱える問題にアプローチするために必要なデータを集め、研究計画を作成する。データ分析結果の解釈やレポートの作成、発表を行う。

(2) 普通科2年「SS探究Ⅱ」（総合的な学習の時間に実施）

ア 目的

課題研究を通して科学的に探究する能力と態度を育む。また、課題研究を通して視野を広げ、自己の在り方・生き方について考える機会とする。

イ 内容・実施方法

a 基礎研究

理系と文系の両方の基礎的な研究等を体験し、デザインチャレンジに向けた研究手法を通して科学的リテラシーを磨く。

b デザインチャレンジ

地域の方々や専門性を持った職業人をはじめとするキーユーザーへの取材から、それぞれのニーズや願望を汲み、科学的リテラシーをもって生活をより一層豊かにするようなプロダクトやサービスをデザインする。

5 宮城県仙台二華中学校・高等学校

(1) 仙台二華が目指す人物像

そこに生きる人びとに共感を覚え、将来自分が行動するとき困難を抱えた人びとの視点に立って行動することができる人物

(2) 仙台二華のグローバルリーダー像

いま、自分のいるところでグローバルな視点を持って、リーダーシップをとって行動できる人物（例 中小企業の中堅社員、地方自治体の中堅職員、中堅教員 など）

(3) 身に付けさせたい資質・能力

- 1 現在社会を生きる地球市民としての「適切な世界観」
- 2 問題の原因や構造の「本質を見抜く力」
- 3 そこに生きる人びとの気持ちを受け入れることのできる「共感する力」
- 4 人間や社会の理想的なあるべき姿を具現化する「構想力」
- 5 多様な人びとの意見を聞き、自分の考えや立場を「相対化する力」



適切な世界観を持って行動できる人

(4) 仙台二華の研究テーマ

北上川／東北地方、メコン川／東南アジアをフィールドとした世界の水問題解決への取り組み

(5) 水問題をテーマにした理由

- 「国連ミレニアム開発目標 2015 報告書」より
- ・約 6 億人以上が改善された水源を利用できない
 - ・約 2.4 億人が衛生的なトイレを利用できない。
 - ・毎日 5 歳以下の子ども 800 人が下痢性疾患で命を失っている。
- 「国連 世界水発展報告書 2015」より
- ・現在のペースで水の消費が続けば、2030 年には世界に必要な水資源の 40% が不足する。



将来の（現在も）リーダー（全ての人）が避けては通れない問題

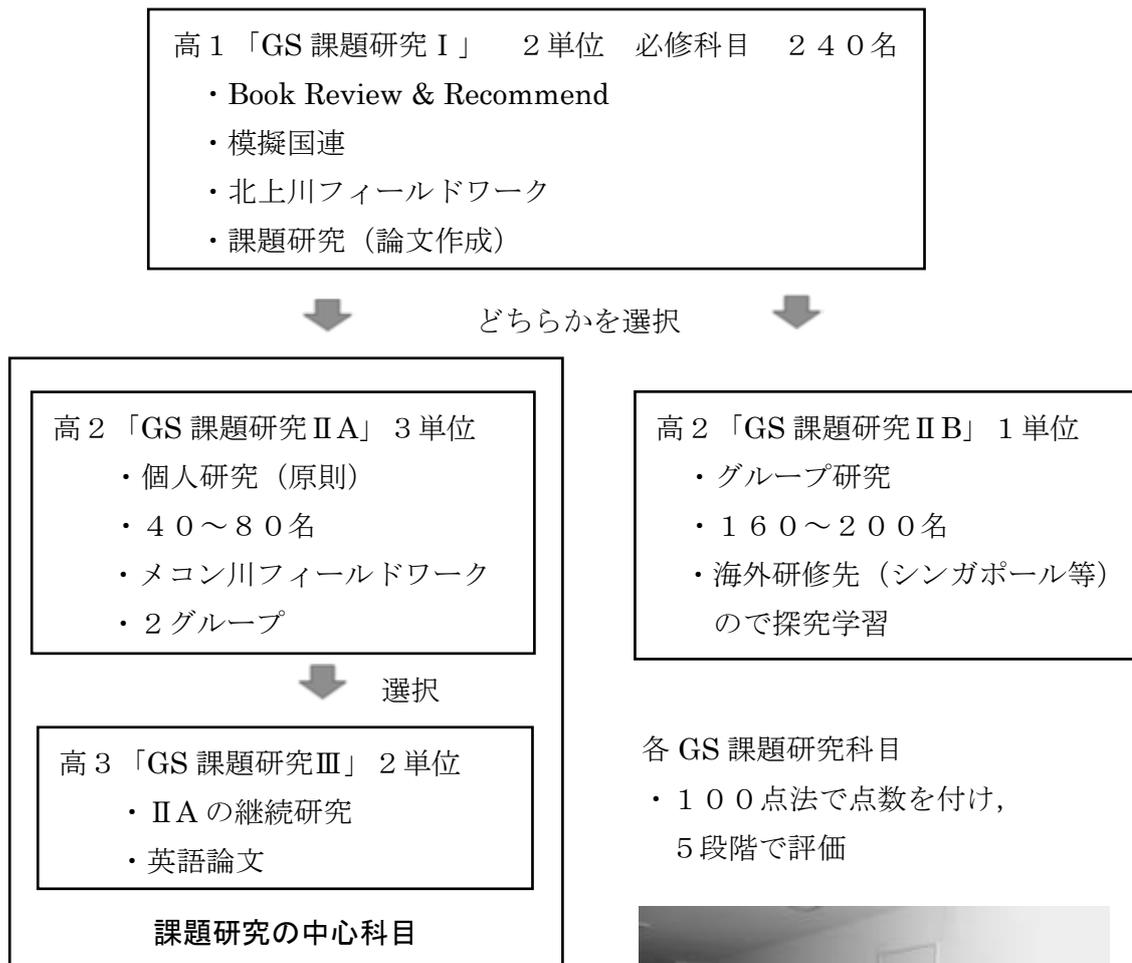


現地でのインタビュー調査



現地での雨水タンク作成

(6) 3年間の学習の流れ（学校設定教科「グローバルスタディ（GS）課題研究」）



(7) GS 課題研究ⅡA・Ⅲのグループ構成

ア メコン川グループ

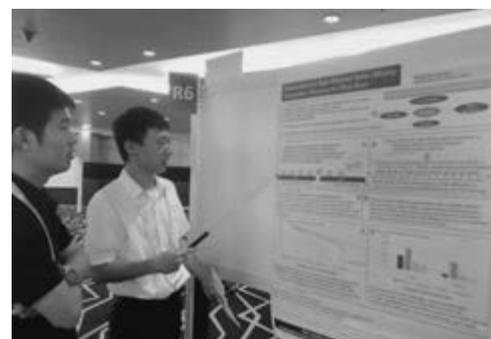
- ・ 雨水グループ
- ・ バイオトイレグループ
- ・ 教育・エコ容器グループ
- ・ 塩害・貧困グループ
- ・ アンコール遺跡群グループ

イ 東北大学連携グループ

- ・ 人文科学グループ
- ・ 河川の活用実態調査
- ・ 近年の豪雨と水関連災害発生の特性
- ・ 東北地方における霧の発生地域の分布とその特性



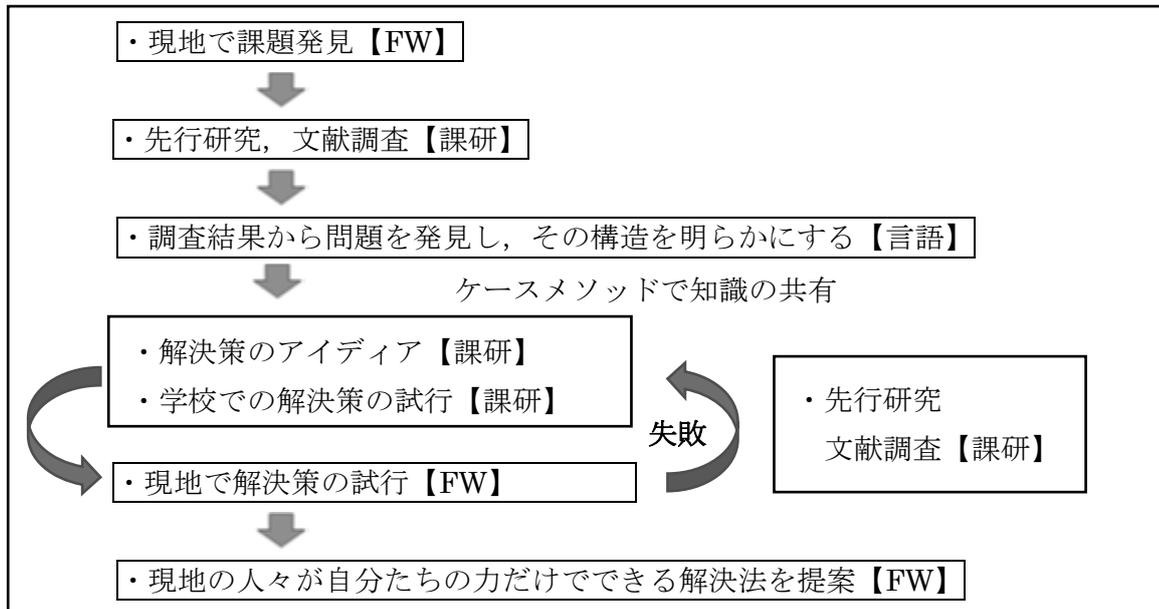
廊下での言語活動



学会発表

(8) 仙台二華 課題研究のつくり

課題研究（課研）、フィールドワーク（FW）、言語活動（言語）の一体化



本当に正しいのか？ ← 専門家の助言・学会発表

(9) 特徴（※← 関連項目）

- ・本質的には国際支援活動（誰かのために） ← 生徒のモチベーション
- ・その過程で多くの問題・課題が発生するが，
その一つ一つが課題研究のテーマになる ← テーマ設定
- ・徹底した現場主義（年に2回のFW） ← オリジナリティー
住民の信頼を得る
現地調査の実施
- ・留学生（東北大学大学院生）に指導依頼 ← 教員も生徒と一緒に勉強
（工学部・医学部・農学部）
1対1形式での英語による相談
- ・正確を期するために学会等での発表 ← 生徒のモチベーション
専門家の助言を得る
（水問題は健康や安全に直結）
- ・近隣の小中学校での水問題の啓蒙活動 ← 生徒のモチベーション

(10) カリキュラム上の工夫（高大連携関係）

- ・東北大学工学部の教員3名及び大学院生3名の月2回程度の来校
東北大学連携グループの指導
- ・東北大学文学部の全面協力（文学部事務室が窓口）
- ・東北大学大学院在籍留学生からの指導（本校の非常勤講師として毎週木曜日来校）
- ・必要時に，大学の先生方に相談できる体制構築

6 長崎県立長崎東高等学校

(1) ベトナムフィールドワーク

ア 実施概要

班	期間	場所	主な研修内容
医療班 (4名)	R1.7.29～8.2	ホーチミン	・国立衛生疫学研究所訪問（長崎大学熱帯医学研究所拠点） ・バクジャン農林大学（研究室訪問）
平和班 (4名)	R1.8.3～8.7	ハノイ ハイフォン	・クチトンネル、戦争証跡博物館見学 ・現地学生との交流会、平和村訪問（職員へのインタビュー） ・平和活動家グエン・ドク氏との夕食会 ・日本語学校訪問（授業見学、生徒との交流）
水 班 (4名)	R1.8.13～17	ハノイ ハロン	・カットバ島、ランハー島、水上生活村視察 ・ハノイ市内研修（ホアンキエム湖等を視察） ・ハロン市内での水質調査、下水処理場視察

イ 事前学習

大阪府立大学・大塚耕司教授による講演会

「ベトナム・ハロン湾における持続可能な環境活動について」

ウ 成果発表

次項「シンガポール国立大学における模擬国連」のプログラムの一環として、同大学生へ研究成果を発表しフィードバックを得た。



ハロン市内での水質調査

エ 生徒の感想

- ・研究を進めるうえで、人とのつながりや協力することの大切さを学んだ。
- ・枯葉剤の恐ろしさを目の当たりし、平和教育を充実させることの重要性を再確認した。
- ・長崎の川とベトナムの川の水質を比較し、多くの興味深い結果を得ることができた。

(2) シンガポール国立大学（NUS）における模擬国連

ア 実施期日 令和元年11月23日～24日

イ 対象生徒 2年生国際科80名

ウ 内 容 シンガポール・マレーシア修学旅行において、シンガポール国立大学の学生と協働。生徒が各国の国連大使となり、決議を採択することをゴールとして英語で協議や交渉等を行う。



模擬国連終了後の様子

エ 担 当 国 南アフリカ、フランス、スイス、アメリカ合衆国、パキスタン、ソマリア、中国、ブラジル、アフガニスタン、日本、シンガポール

オ テ ー マ How to Reduce Child Mortality（子どもの死亡率を低下させるには）

カ 生徒の感想

- ・互いの意見に耳を傾け、相互理解に努めることの大切さを学んだ。
- ・下調べを十分にしていたため、他国の想定外の意見にも対応することができた。
- ・最終的に細部まで考え抜いた決議案が完成し、達成感を味わうことができた。